
あおいと仲間たち

大蚊里伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおいと仲間たち

【Nコード】

N5210V

【作者名】

大蚊里伊織

【あらすじ】

あおいと、その仲間たちは、妖怪や鬼を退治していた。ある日、鬼が現れる。作られた鬼をたいじするため、あおいたちは戦う。

第一部（前書き）

二年前に作った、あちこちあらがある作品ですが、よろしければ読んでください。

第一部

小高い丘に緑に囲まれた寺がひとつあった。

女が箒であたりを掃いていた。彼女の顔は髪のもで上半分はおおわれていて表情は見えない。

ふいに顔をあげた。

「おはようございます。あおいさん、今日も補習ですか」

「おはようございます。うん」

髪の短い、分厚い眼鏡をかけたブレザー姿の中学生が答えた。

徒歩通学らしく、かばんをかかえて坂を下っていく。箒をもった女はその背中を見送る。

それから三十分後、また一人、今度は学生服姿の少年が走り出る。さっきの女はもういない。

「遅刻だ」

走っていく。

寺は静かにたたずんでいた。

「お茶が入りました」

先刻の女が、お茶をいれている。

うん。とかああとか言いながら、住職らしき男が飲む。

年の頃は50代くらいだろうか。髪はある。坊主にする宗派ではないようだ。

「たくやはもう行ったか」

「はい、先ほど走って行かれました。三限目から授業があるので私もそろそろ出ます」

「おう、そうか、レイン」

「はい」

「帰ってきたら札を数枚頼む」

「はい」

「あとケイ君にも仕事を頼みたい」

「ちょうど今日明日は休みですが」

「そうか、悪いが」

「いいですよたぶん」

レインは笑った。

最初から、あおいには呼び捨てで名前を呼ばせていた。たくや。

と。あおいのことを、たくやは苦手だったが、嫌いというほどでもなかった。

それはたくやとあおいが13歳の時のことだ。

辺りが静寂に包まれていた。一人の少女が立っていた。あおいだった。

彼女は矛を持ち、立っていた。

その視線の先に怪物がいた。

場所は寺の敷地内。

「あおい」

たくやは叫んだ。

「たくやは結界から出ないで」

あおいと呼ばれた少女がさけぶ。いつもの眼鏡をしていないあおいは、きれいなかおだちをしていた。

百年にひとり出るかでないかの、退魔の能力を持つ天才、という

のがあおいだった。

孤児院からたくやの父親に引き取られ、ひきとられた時もいわくつきだった。

歩くそばから浄化する能力を発揮して、霊を消してしまうのだ。もちろんすぐに消耗してしまう。それでは生きていけないと、たくやの父親が、眼鏡に封印能力をつけてかけさせた。

たくやには、幽霊をたまに見る程度の能力しかなかった。そのことを考えるとたくやはあおいに気後れしていたのだったが。

その時、たくやは、あおいのことを何にもわかっていなかったのだ。

そう気付かされたのは後のことで。

守られてるだけではだめだ。

そう思ったら、口から呪文が流れだしていた。

あおいが来る前から、父親にさんざん言われて覚えたものだ。たくやは結界から出た。風がふいてくる。一心に唱えた。自分の周りに淡い光が集まってくる。

大きな波動がたくやを襲う。その瞬間呪文が完成した。

たくやは怪物を見た。人が何人もくっついてる化け物だった。

もとは人間だったのかも知れない。

淡い光がたくやの手の中で強烈な光に変わる。両手を前に出して、波動を受け止めた。相殺され、消えていく。

「たくや」

「大丈夫だ」

あおいの声に答える。

あおいは何のために戦うのか。たくやにはわかっていなかったのだ。

彼女が今の家族をどれだけ大事に思っているかを。

呪文があおいの口から流れ出る。たくやも同じ呪文を唱え始める。

呪文は共鳴を起こし、妖を直撃する。

グルルルルル。

怪物は唸る。

（もう少しだ）

たくやがまた違う呪文を唱えはじめる。両手を前にかざし、怪物の動きを止めた。

あおいが矛をかまえ、走り出す。

矛が突き刺さった。光が爆発し、怪物が白く光るとばらばらになつて消えていった。

「たくや」

あおいがたくやに抱きつく。泣かれてたくやは困る。
ぎこちなく抱きしめ返した。

「よかった」

小さく肩がふるえている。あおいは初めて大きなあやかしと対峙したのだ。怖かったらしい。

いつも冷静な彼女の別の側面を見た気がしてたくやはふいに自分がずつとあおいを好きだったんだと思った。

自分の気持ちに素直になれずにきたけれど。

「あおい。俺、お前の力になれるように頑張るから」

「うん」

「ひとりで背負うな」

たくやは言った。実力ではあおいに勝てないだろう。それでも力になることはできるはずだ。強くなりたい。たくやは心底そう思った。

それが、最初の話。

あおいもたくやも部活はやっていない。

早く帰ってきて宿題をすませる。

レインの作った料理を食べ終わって、本堂に全員が集まる。

札が本堂の四隅に張られている。

「夕方から刀の鍛練を行う」

妖刀を作るのだ。

「百鬼夜行が来るように道を作った」

全員気をしめてかかるように。とたくやの父、しのぶは言う。

たくやにはひと振りの刀が渡された。

「これを一晚守れ」

普段着のままで堂の真ん中に座る。

結界が張られ、東西南北に座ったレイン、ケイ、あおい、しのぶのそれぞれの呪文が流れてくる。

神楽のお囃子のようなものが聞こえてきた。妖怪たちがこちらに向かってきているのだ。百鬼夜行。しのぶは結界の真ん中に道をつくり、たくやのいるところに通す。

たくやはじつと、刀をもったまま正坐している。

たくさんのあやかしたちは、たくやに気付かず、あちこち走りまわる。

「おやこんなところに刀があるぞ」

気づいた者が触ってきた。そのあやかしはすつと刀に吸い込まれる。

たくやは薄く眼をあけた。昔の自分なら逃げ出していたかもしれない光景が広がっていた。

たくやは一言の言葉も発しなかった。明け方まであとどれくらいあるのか。背中に、誰かが立っている気配がする。後ろに神経を集中させながらじつと座っている。

（何があっても手放すな）

たくやは思う。

静かに息をしているとこのあたりの妖怪たちを集めた百鬼夜行が収束して刀に吸い込まれていく。集団がどんどん小さくなっていく。妖刀を作る儀式。あとは朝日が昇るのを待つだけだ。たくやが息をもらす。

妖怪たちは死ぬのではない。彼らは何度でも生まれ代わってくる。その循環をここに一時閉じ込めておくだけだ。彼らは刀の力となり、刀の中で楽しく暮らし、三年経つと返される。

その期間だけ妖刀として使うことができるのだ。

朝日がのぼってきて堂内を照らし始めたかのように赤く染まり出す。

（まだだ）

まだいる。とたくやは思う。生臭いにおいが立ち込める。鬼という言葉がたくやの頭に浮かぶ。本堂の四隅から聞こえる家族の呪文。じっと、耐えた。

「刀を渡せ」

耳元で低い男の声がした。

刀を渡せ。

もう一度、大音響で聞こえた。

たくやは微動だにしなかった。

やがてまた暗くなる。あの赤い光はまやかしだったとわかる。

今何時頃なのだろう。

ドンドンドンと、足音が後ろでする。

助けて。とあおいの声がした。たくやはそれでも動かない。

助けてなんていうあおいではない。いつも無口で、家族にはそれでも多少しゃべるけれど口数は少なくて。黙って涙を流しているよ。うなあおいがそんなことを言うはずがない。

やがてひゅつと音がして、矢が床に刺さった。たくやの体すれす

れのところだ。それでもたくやは動かなかった。

彼らは直接たくやに触れることはできない。が恐ろしい妖怪たちだということに違いはない。

気配が少しずつ消えていく。

本当の朝がくる。とたくやは思った。

「俺の負けだ」

耳元でまた声がして、刀の中に最後の鬼が入っていく。というのが感覚でわかった。

本当の朝が来た。

唱え続けられた呪文の詠唱が終わっていく。

日光が本堂を照らしはじめた。

たくやは終わったか、と刀を置いた。

「今日もちやんと授業あるんだぜ、親父」

と。たくやがぼやく。

「さぼるか？」

「行くよ」

親父のくせにそんなこと息子に勧めるな。とか言いつつ立ち上がる。

本堂に貼られた、レインの作った札をケイがはがしている。

「あおいは今日はどうするんだ」

「補習」

あおいはまじめである。「ごはんもそこそこに学校に出るのだろう」

「ごはん作りますね」

レインが言った。

「ケイ君は食べていくか？」

ケイと呼ばれた青年はそうですねとか答えつつ、少し考え込むようにする。

「今日は早番なんで食べてる暇なさそうですね」

「そうか」

ケイはカフェでギャルソンをしている。山を下りたところにあるところだ。

スクーターで行く。

美形だが意外に熱血漢、レインの恋人である。

茶色の髪にピアスをしている。すらりとした体はよく鍛えてあった。

「もう一人が急に風邪ひいて休めなかったんだ」

と、ケイはレインに言う。

レインはそう。と呟くように言う。

二人が付き合い始めたのはいつからだったのか、どうやって二人がくっついたのかはあおいもたくやも知らない。

ケイは大学には行かず、喫茶店で働いている。レインは特待生で大学に通っている。二人とも寺に間借りしていた。

ケイの本名は尾道ケイ。レインは渡辺レインと言った。レインはハーフである。

梅雨にそろそろ入ろうという気候。過ごしやすい時期だ。

食事が終わるとそれぞれ日常に戻る。

しのぶは寺の本堂に一人座す。刀が目の前にあった。戦いはすぐそこまで来ているとしのぶは思う。

それなりに寺を守って生きてきた。妻が亡くなった後こちらに来てからずっと。

「今日は一日晴れそうだな」

呟いた。晴れ渡った空に雲が浮いていた。ゆっくりと刀を引き抜く。はこぼれひとつない刀は妖気を宿していた。

「たくやもここまでになったか」

と。つぶやく。父親らしいことはなにひとつしてやってないとしのぶは思う。しのぶには息子はたくやひとりだけしかいなかった。亡き妻の忘れ形見だ。

口応えもする反抗期のかたまりみたいな時期の割には会話があつ

たが。たくやは部活もやらず、仕事となればきちんと仕事をする。本当に親馬鹿と言われてもいい、良い息子を持ったと思う。

「やれやれ」

過去を振り返るようになったら年寄りだと言うが。そろそろ息子にも話さなければならぬ時が近づいていることを知る。妻のことすべてを。

この晴れ渡った気持ちのいい空に、しのぶは苦い顔をした。禁煙して長い間、煙草を吸いたくなかった。

たくやが帰ってくるかと客が来ていた。自分の部屋に行こうと、客間の前を通ると、背筋がぞくりとした。客間を思わずそりりと覗くと。妖怪がしのぶの首をつかんでいるところだった。

「親父」

思わず戸を開け放つ。

「大丈夫だ」

しのぶは刀をすらりと抜いた。妖怪がひるんで首をしめるのをやめる。

妖怪はゆっくりと形を戻し、普通のサラリーマン風に戻った。

「仕方がない今日は引き下がります」

とネクタイを正して男が言う。たくやが一步前に出ると、飛び跳ねて、壁にすっと消えていった。

「今のは？」

「刀を狙ってきた者だ。たくや、話がある」

しのぶは言い、たくやに座るように促した。たくやは黙ってそこに座る。

「お前の母親のことだ」

たくやは押し黙る。

「俺の？」

ずっと母親がいなかったことに疑問があった。けれど聞けなかった。いつか話してもらえたらとうとは思っていたが。

「あなた」

妻は言った。

「たくやを」

妻の綾香は、ほとんど能力を持たない女だった。たくやが3歳の時だった。妻は妖に食われて死んだ。たくやには言っていない。壮絶な死だった。まだ寺に入る前のことだ。昼間は霊能力者として働いていたころの話だ。しのぶの目の前で、妖怪がマンションの部屋に現われた。部屋にはつてあった結界に軽々と入り込んだそれは、綾香を殺した。たくやは何も分からずただ泣いていた。

しのぶは全力でたくやを守った。その時の傷は背中に深く刻まれている。妻の綾香はその妖怪に飲みこまれていった。

たくやはだまって話を聞いていた。その時なんとか結界に封じこめた妖怪が、出かかっているのだ。

「その妖怪は力のある者を食って大きくなる」

そして手下が何人もいるのだと言うと、しのぶは黙った。二人の間にまだ帰ってこないあおいのことが浮かぶ。

「あおいが危ない気がする」

たくやが立ち上がる。

「ちよつと学校見てくる」

たくやが立ち上がり、部屋を出ていく。と、あおいが寺の門を入ったところに立っていた。

「あおい」

たくやが駆け寄る。あおいは黙って鞆を地面に置いた。風があおいを中心に巻き上がる。

「妖怪の気配がする」

「ああ」

たくやが答え、あおいは両手を上に掲げた。空中から矛が下りてくる。

それを手にとると、ぶんと振った。

「なんか教室からついてきたのがいる」

あおいが構える。

「大丈夫か」

「うん」

私は大丈夫だけど、舞がおかしくなってたから昇に預けてきた。

とあおいが言う。あおいとたくやの同級生で、同じ学校に通う靈感のある少女だ。昇も能力を持っている。

「合流したほうがいいかも」

「そうだな」

「携帯かけるよ。とりあえずこいつをどうにかしてから」

と、言いながらあおいが矛を前に繰り出した。空中から腕が出てきた。人の腕ではない。赤い色の剛毛の生えた鬼の腕だ。

切りかかるとザーッと黒い砂が切り口から出てくる。

「鬼か」

たくやがざつと後ろに下がった。

「本体が出てくる」

寺の結界にぎりぎりと呼し入ってくる気配。

やがて鬼が顔を出す。

「あおい、たくや」

声がするのでそちらを見ると昇と舞が立っていた。

「気配を追ってきたの」

と舞が叫ぶ。

四人で囲む形になる。

「舞ちゃん大丈夫？」

昇が言う。

「だいじょうぶ平気平気」

妖気に当てられると調子が悪くなる舞は、しかしその体質で相手の強さを測れる。彼女が大丈夫ということは大したものじゃない。

「いくぞ」

昇が空中から弓を取り出した。長い弓だ。弦に糸が張られているが矢がない。弓を引くと光が集まってきた。矢の形になる。手を離す。ひゅんと音がした。

もういっぽん出てきた腕にささる。だが、鬼はそれでも外に出てくる。

「出てくる」

舞が叫び、がたがたと震えだした。

「もっと大きなのも来る」

「舞ちゃん結界張るからこつちへ」

あおいが叫ぶ。うん。と舞が走る。肩までのストレートの髪が揺れる。

たくやが呪文を唱え、結界を張る。

「いつくよ」

のぼるが叫ぶ。あおいが矛を構えなおした。たくやが舞の結界を維持しつつ寺の結界の強化もする。

片腕がぼろりと落ち、肩に矢を撃たれた鬼が地面に降り立った。

赤い鬼だ。

ぐるるると生臭い息とともに声を出した。

鬼はもともと人間だった者だ。他人に操られて鬼になってしまう者と、自分で鬼になってしまふ者という。

自分で鬼になる者は、しゃべることができるのが普通だ。だからこれはたぶん他人に操られて鬼になった者だ。

「加勢します」

レインの声と、無言のケイ。レインが色のついた札を投げると、そのまま犬の姿に変わる。鬼に食らいついて消えた。

ケイの後ろから影が現れる。

「いけ、道成寺」

ケイが低く言うのと影は着物を着た大男に変わり、鬼に向かって走っていく。激突した。

「捕まえておきますから援護を」

大男は言つと、レインの札が飛ぶ。鬼に張り付くと白い糸が札から噴き出した。顔を覆ったその白い糸を外そうと鬼が片手を出す。道成寺と呼ばれた男がその鬼を捕まえる。あおいが矛をかまえ、走る。一瞬道成寺が手を離す。鬼の首に矛がぐさりとささった。矛から光がこぼれた。鬼が苦しみながら消えていく。

「まだ来る」

鬼が通つてきた穴からまだ何かが来る。舞が失神した。

「大きい」

あおいが小さくつぶやく。それは大きな影だった。

全員が構えた。

「来る」

あおいが言う。

昇が弓を引き絞る。

たくやが呪文を唱え始める。

咆哮しながら大きな鬼が出てきた。

「いくつかの霊の集合体だ」

ケイがそう言いながら立っている。

レインが静かに札を放った。何枚かの札が、鬼に向かっていく。ぼうつと燃えだした。

「強いな」

「ええ」

全員が構えると、大きな鬼が叫びをあげた。

グルルル。

ザンバラ髪に緑色の皮膚、腰につけた布、目は赤く光り、口には

牙が見えている。

「一気に行くぞ」

たくやが言う。

あおいが矛を構えなおす。

舞が起き上がった。

「大丈夫？」

中でも一番背の低い昇が聞く。

「大丈夫」

昇のほうに鬼が向かっていく。

昇が由矢を放つが、突き刺さって黒い血が滴りおちても鬼の速度は変わらない。

昇がふつとばされた。

「昇君」

気絶からなんとか戻った舞が叫ぶ。昇は立ち上がった。

「舞ちゃんとハネムーン行くまで死ねないんだよ僕は」

口の中を切ったらしい昇が血を吐く。

「馬鹿あ」

舞がその言葉に叫ぶ。

あおいが走って矛を突き立てる。白い光が矛からほとばしり、たくやが紡ぐ呪文でそれが大きくなる。

「道成寺さん」

あおいが言う。

「はい」

「できるだけ時間を稼いでください」

「ケイ」

「ああ、行け」

レインに促されてケイがそう言うのと道成寺が走る。

道成寺も鬼だ。

人が人のまま鬼になった鬼。

ケイの眷属だ。

ケイはもともと鬼だったが、レインと出会って鬼であることを捨てた。

今は人間である。

「レイン」

「札なら何枚でもあります」

レインは言う。

「あおい」

あおいは頷く。

「光と闇のまじないよ、わが力を光に変え」

矛を立てると矛が全体に光り出す。

「我が道を照らせ」

「あおいちゃん」

舞が言う。

「戦うしかないんだ」

僕らは力を授かって生まれ、こうして出会ったのだから。

昇はそう呟く。

レインが札で包囲していく。

ケイの周りを風が吹く。

ケイは、袴姿だった。

正装である。

「鬼か」

道成寺が一步、また一步と押されて下がる。ケイはつぶやいたまま動かない。

ケイは、人間に戻った時に、その力の半分を失った。すべて失わなかったのは奇跡だったのだが。

「歯がゆいものだな」

と呟く。

レインが札を使い、また円陣を組む。

雷のような光が札からあふれ出る。

鬼が、やっと動きを止めた。

あおいが矛で貫く。

昇が矢を矢継ぎ早に放った。

背中に矢を何本もさし、鬼が咆哮する。

「やったか」

ケイが言う。

「まだ」

鬼の腕が増えた。

「増えればいいってもんじゃない」

昇が言いながら弓を構えなおす。

あおいの渾身の一撃も食い止められてしまった。

「強いな」

ケイがつぶやく。

第一部（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

第二部（前書き）

第二部。ちょっとは話が進んだかな？

第二部

数日前のことだった。

アスリートが次々に心臓発作で亡くなった。その後病院から死体が消えたと新聞で報道されていた。

ケイはその事件との関連を考える。

誰かが後ろで動いているのだ。大きな何かが。

アスリートたちの肉体をつなぎ合わせて、最強の鬼を作ろうとしている、そんな気がする。

「レイン」

ケイはレインに呼びかける。

「札はあと何枚ある」

「5枚」

「なら十分だ。俺も出る」

「ケイ」

「大丈夫だ」

走り出した。

道成寺の横に並んで鬼に掴みかかる。

腕を一本つかむと、めりと音を立てて抜いた。

「力不足で悪いな」

黒い血を浴びながら、ケイは笑う。

「舞ちゃん」

昇が叫ぶ。真っ青な顔をした舞がけなげに立ちあがった。

「どこかにばらばらにできる一点がある」

舞が叫んだ。

結界で一応遮断されているとはいえ舞には感覚で敵の強さがわかる。舞は見えるのと相手の力を見極めること以外に何もできない。

足手まといでごめんねといつもそう言う舞に、いつもそんなことないよ。と仲間は言った。

全員でかかれれば越えられない障壁はない。とあおいもたくやも思う。

「最後の攻撃行くぜ」

たくやの声。

全員が一丸となる。

あおいがまた矛を構えた。息が上がっている。

「大丈夫」

まだいける。たくやが呪文を唱え始める。風が集まってくる。レインは札をすべて投げ、空中にとどめる。火がとる。

道成寺の首を鬼がつかんだ。

「く」

その腕をあおいが切り取る。黒い血がまた噴き出た。ケイはもう一本の腕をまたもぎ取ると笑った。戦いこそがすべてだった時代に戻るような気がして戦いに赴くのは怖いのだとケイの言葉をレインは思い出す。

昇はその隙に鬼の後ろに回る。

弓を構え、矢継ぎ早に射る。矢は昇の中にある力を具現化したものだ。撃てばうつほどに疲労は増していく。男としては小さいほうの成長期だと言いつける身長は164センチ。舞が156センチで似合いのカップルである。

昇が肩で息を吐く。眼の下に隈ができている。

「ちくしょうまだ倒れない」

昇がそう呟く。

「強制浄化」

たくやが呪文を唱え終わって解き放つ。

人間の霊相手なら一発で浄化できる技だが、効くかどうかは分からない。

グアオオオオオオオオ。

鬼がまた咆哮した。

痛みがあるらしい。顔を覆う。ぼとぼと。と、音がして鬼の肉が崩れていく。

「やったか」

ケイがつぶやく。

「まだだ」

と、道成寺が言う。

鬼を作り上げている集合霊の一体か二体が浄化されたく、崩れてきてはいるが、まだ原形を保っている。

たくやがもう一度呪文を唱え出す。

あおいが今度は頭を狙って走り、矛はケイと道成寺の間を抜けて刺さる。

目を狙ったのだ。

そこからも血があふれだす。

道成寺とケイを振り回し、鬼のたうちまわる。

「もう少しだ」

ケイと道成寺が離れて、あおいがまた矛を刺した。

腹のあたりを刺すとそこから黒い血がまたあふれていく。

何体かの集合霊のかたまりのつなぎ目を狙ったのだ。

「やった」

昇がそう言いつつ座り込む。

さすがに鬼も動かなくなる。肉塊になり血のおいがしたあと、消える。

全員が肩で息をしていた。

舞の入った結界が消えて、舞も残留した靈気に触れて体を震わせた。

レインが結界を張りなおすために寺の結界がどの程度壊れたか見ている。

次の敵が来た時のために結界を張りなおす必要があるだろう。

「結界の張り直しが必要です」

レインがそう言いつつまだなにも書いていない白い紙を出して空中に放り投げて術を唱える。

「これでしばらく大丈夫」

「うちの結界、だいぶゆるくなってるんじゃないか」

たくやが言う。

「そんなことはないですが人間は入れるようになってますから人間に寄生して入ってくるものが防げないだけです。今日みたいなのが来ちゃうとちょっとやっぱり弱いかなと思いますけど」

今日みたいな大きいのがいくつも来たらお手上げですね。

と言いつつお茶にしますか。などとのんびり言う。

「俺は貫徹で眠いから寝る」

「じゃあ昇君と舞さんは来ますか」

「わーい」

レイン手作りのお茶菓子が出るのだ。

甘いものが好きな舞とそれなりに女の子になってきたあおいがお茶に参加する。昇も当然一緒だ。

「ケイは？」

「バイトの途中で抜けてきたから仕事に戻る」

「残念ですね」

「俺の分の茶菓子残しておいてくれ」

ここにも甘党がいる。

道成寺はケイの影にすうっと吸われていく。

「さてと」

「眠い」

「行きますか」

とにかく寝たいと呟きながらたくやも全員の後についていく。

寺の奥で、しのぶは座っていた。
しのぶは思う。

あおいを引き取ったのは導きがあつたからだ。レインは一族の支流から出た卓越した能力を持つ符術師。ケイは、前世でレインが惹かれてしまった鬼だった。ケイは眷属がいて、その眷属も実体化できる鬼だ。ふだん呼び出されないときはケイの影に隠れていて、ケイの呼び出しに出てくる。普通の男にしか見えない。

そしてたくやのことを思わなかった日はない。一人息子である。大事に育てたとは言いが、それでもここまでグレずに育った。どやどやと寺に人が入ってくる音がした。

「しのぶさま」

「なんだ」

「お茶が入ったので一緒に飲みませんか」

レインの声だった。

「わかった」

しのぶがそう返事をしつつ刀を持って部屋を出る。

「刀を使える人間はうちにはひとりだけか」

刀は刀を使う者を選ぶ。

みんなでお茶をしている中、着替えて出て行こうと顔を出したケイにしのぶが言う。

「ケイくん」

「はい」

「これは君に任せよう」

と。しのぶは刀をケイに渡した。

「いいんですか」

「ああ」

「あ、たくやくんなら、寝ると言って自室に戻りました」
レインが言う。

「そうか」

貫徹できつつちり授業までうけてきたら眠いに決まっている。ああいは別だが。

「ケイクン」

「はい」

「この刀の靈力を永遠にする力は、君しかもっていない」

「そうですね」

かつて鬼であり、今も靈力を持つケイは、闇の力をその刀に補充できる。

「でもこれもちやあって、たくやくんに悪い気がするんですが」

「あれにはあれのやり方と戦いがある。大丈夫だ」

しのぶの言葉に、ケイは過去をたくやに話したんだと思う。ケイとレインは、たくやの母親がなぜなくなったのか聞いていた。それをずっと押し隠していることも。

「あーあ」

眠くて布団に入ったのだが、眠れない。

たくやはひとりで呟いた。母親のことを聞かされて、それなりにショックだったのだが。

母親がいなかったというのが当たり前で育ってきた。母親がどんなものか知らない。

ただ、自分から母親というものを永久に奪った者には憤りのようなものを感じた。

今がそれなりに幸せだけれど。母親がいたらもっと楽しいんじゃないかと思う。

「なんかなあ」

考えるのをやめた。

代わりにあおいのことを考える。

最初はなんとなく苦手で何を考えているのかわからなかった。そのうち、いろんなことを表に出せないんだなと気づいた。たくやつて呼んでいいというと、うんと言ってほほ笑んだ顔を覚えている。

長い時間、一緒にいて、この先も一緒にいたいと思う。

たくやは目を閉じて眠ろうと思った。

「たくや、夕食の時間」

あおいの声で目が覚めたたくやは大きなあくびをしながらわかつたと答えてベッドからもそもそと起き出す。

「あおい」

「ん」

「宿題手伝ってくれ」

「なんの？」

「英語。明日一番で当たる」

「わかった」

あおいは頭がいい。一度言われたことは大概覚えている。授業だけ受けていても十分ついていけるはずだが、補習も受けている。

高校は私立の特待生を狙っているらしい。特待生なら授業料を払わなくて済む。

それにくらべるとたくやは赤点ぎりぎりである。

塾に行くような余裕はうちの寺にはないしなあ。とかつぶやく。

「ん？」

「あ、ああ、なんでもない」

なんでもない。未来についてなんて今は考えられない。

夕食の席につく。

ごはんを食べて、また部屋に戻る。

「たくや、勉強」

「ああ」

「どこでやる？」

「下のご飯場のテーブル片付けてやるか」

「うん」

じゃあ先に行ってる。と言いつつあおいがひっこむ。

たくやは勉強道具を持つと部屋を出た。廊下に出ると、月が出て

いた。きれいな月だ。

「きれいだな」

たくやはひととき足を止めて、また歩きだした

第二部（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

第三部（前書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
まだ続きます。

第三部

あおいは宿題を学校で片付けてから帰ってくる。舞と昇は弓道部なので彼らと一緒に帰ってくる人が多い。

宿題を片付けて帰ってきて毎晩矛の練習をする。

朝も早い。きっちり補習に出る。先生受けは割といいほうだ。学年トップか二番くらいの成績を毎回たたきだしている。

友達は少なく、寺に引き取られている両親のいない子だとみんな知ってるためか、小学校のころはいじめられた。が、中学に入ってから成績が良いとわかれるといじめはなくなった。

あおいはふだん口数が少ない。いつも怒ってるようにさえ見えるせいか、人が寄り集まるような性格ではない。

一度昇が風邪をひいて休んだ日に学校でだけものが出て、動けなくなっている舞を助けてから舞と昇に、同じ能力を持つんだとわかってもらって、それから友達づきあいをしている。

聞いた話だが、昇の家も代々霊能力者を出す一族で、昇は弓を使って化け物を攻撃できる。

霊を浄化する能力はあまりないそうだが。

あおいはひきとられるまで体が弱かった。そういうものを片っ端から浄化してしまう体質だったせいもある。それを眼鏡でおさえるようになってから体の調子がよくなり、運動もできるようになった。それが楽しくて、矛を授けられた時からずっとその練習を欠かしたことはない。

「私には何にもなかった」

とおおいは思う。何もなかった。親もなく、体が弱く、しのぶと出会ったのは、孤児院から抜け出した夜のことだった。孤児院で探している人間がいることも分かっていた。けれど。おおいは、今日の夜外にでなさいというやさしい声を信じた。その声が誰の声だったのかは分からない。しのぶに出会った時、しのぶは大丈夫かとかけよってきた。１０歳のころだ。

学校にも行けなくらい虚弱体質だったのもあったが、霊を浄化しているのにしのぶはすぐに気づいた。

それから孤児院に連れてってもらったが、すぐにしのぶが引き取ってくれることになった。

おおいが引き取られた時、たくやもまた１０歳だった。仲は悪くもなくよくもない。という関係になった。一緒に遊ぶようになったのはそれから一年もしたころだった。

たくやは呪文を使うことのほうが得意だった。おおいは矛を渡されるとそれが前から彼女の武器だったかのようになじんだ。

「普通逆なんだがな」

とたくやは言った。でも俺は矛を振り回したりするよりこのほうが向いてる。

とおおいにたくやは言った。適材適所なんだろうと二人で答えを出した。

おおいは学校の成績はいいほうだ。体も毎日動かしているせいか体育の成績もいい。ただ、ひとつだけ欠点があった。引つ込み思案で分かっているもなかなか発言ができないおおいは、ペーパーテストはできるのだがそれで成績を悪くつける先生もいるのだ。おおいたちの住んでいる地区は成績の内申点の合計がある程度ないといい学校には行けない。

「たくや」

「なんだ」

「卒業したらどうするの」

「就職つてわけにいかないからな、どっか高校に潜り込む」

「たくや今の成績じゃ無理かも」

「そうかな」

「うん。勉強見るから、もっと頑張ったほうがいいよ」

あおいはたくやにはしゃべる。人前でしゃべることはあまり好きではないが、あおいはたくやとしゃべるのは好きだった。

「じゃあとりあえず宿題から見てくれ」

「うん」

あおいはたくやと勉強しながら自分の宿題も片付ける。

「英語のノート作ってる？」

「作ってない。教科書に書き込んでる」

「ノートの見開き片方に英語、片方に訳書いて、問題集みたいに使えるようにしたほうがいいよ」

「そうなのか」

「うん」

授業はほとんど寝ているたくやは、それでも授業中に教科書にメモとるくらいのことはしていたらしい。

「あとは辞書をまめにひいて単語を覚える」

「うん」

「授業はどこまで進んでるの？」

あおいとはクラスが違う。たくやはええと言いつつ本を広げる。

「レッスン4」

「じゃあ4の英語をノートの左側に三行あけながら書いて」

「ノート持ってない」

「じゃあ持ってくる」

「ありがとう」

そんなことを言いながらその夜はふけていった。

ケイの朝はシャワーから始まる。

ケイとレインは寺の横にある二階建ての建物に住んでいる。あおいとたくやとしのぶは寺の境内にある家に住んでいた。寺は密教系の寺だが、詳しいことは知らない。

「さっぱりした」

朝ごはんは寺のほうで食べる。レインが用意しているころだ。

ケイは着替えると外に出た。

ざあつと気持のいい風がふいた。

刀は肌身離さず持っている。今日は試し切りをするつもりだ。

「竹でも立てて切ってみるか」

刀そのものは最初ぼろぼろの刃のついた靈力もまったく感じられない刀だった。それが祈りと呪術によってよみがえった。

「なんにせよまずごはんだな」

朝ごはんは生活の基本だ。とケイは思う。バイトは今日は休みだ。そういえばバイトの日は刀はどうしようかと考える。持ち込んでこっそりロッカーにでも入れておくかと思う。

「ケイ、ごはんどれくらい食べますか」

「いつも位でいい」

「はい」

寺の奥のしのぶたちが暮らす場所の食卓にたくや以外そろつた。くやはいつも寝坊ぎりぎりに食べて出ていくのでいない。

ケイは昔は刀を持っていた。まだ武士と呼ばれる人間がごろごろいたころだ。今のご時世で刀なんて持っていたら大変なことになる。もちろん無許可の刀だ。

「今日はさんまか」

朝ごはんはさんまに味噌汁にご飯、それからホウレンソウとキャベツの炒め物だ。

ケイはさんまが好物である。

「道成寺さんはごはん食べないの？」

と、あおいがふいに聞いた。

「道成寺は俺の靈氣を吸って生きてるからな」

「ふうん」

道成寺はケイの影になっている。実体化する時はケイの靈氣が削られることになる。それでもケイは平気だった。人間としては莫大な靈氣を持ったためだ。普段放出しすぎて変な靈を寄せ付けられないために適度に靈氣を使う必要があった。道成寺が個別で動けるようにもできるが、普段は道成寺はケイに寄生している状態だった。

ケイは、レインの前世とも出会っていた。彼女が亡くなってから日本が戦争になり、外国にわたって、帰ってきて数十年経て、生まれ変わったレインとまた出会った。

レインはケイを覚えていた。

ずっと何度も見る夢の人ですね。と彼女は言った。俺と一緒にしてくれるか。とケイは聞いた。そして、もう人間に戻るとも言った。

ケイは靈力を半分にする代わりに人間にしろと地獄で閻魔大王に詰め寄った。

ケイは鬼だったが閻に属するものを退治して金をもらう仕事をしていた。

その関係で望みはかなえられた。ケイはレインと暮らした。

後悔はない。一度は捨てた人生をやり直している。そう思う。

「ケイ」

「ン」

「お茶です」

ぼんやりしてますね、まだ眠いんですか。とレインが聞く。あくびまじりにそうでもないんだがと答える。

「今日は仕事ですか」

「今日は仕事休みにしてもらった」

「じゃあ、買い物つきあってください」

「ああ」

「卵が切れてしまってるんで」

「ああそれで今日は出汁巻き卵ないんだな」

「ええ」

「ごちそうさまでした」

あおいが言って立ち上がる。

あおいは用具の入ったかばんはもう用意して戸口においてあるの
でそれを持って学校に行くだけだ。

ケイはあおいのような学校に行ったことはないが、読書が好きで、
それこそ昔の書から最近のライトノベルまで読む。乱読するのが好
きなのだ。

しのぶが無言で立ち上がり本堂のほうに行く。毎日の朝の読経の
ためだ。

あおいが出ていく。

「行ってきます」

もつと早い時間に出ていくこともある。レインが朝寺の前を掃除
するのだが、その時に行ってきますという声が聞こえることがある。
ケイは布団の中でそれを聞く。

「しかしまあ」

ケイが言う。

「なんです」

「うちの女の人たちはみんな早起きだよな」

「ケイは割と寝坊ですよね」

レインがわらう。

「たくやほどじゃないぞ」

「ええ」

「たくやはあれは低血圧らしいな」

「そうですね」

「風邪で病院行って血圧が低いって言われたらしい」
低血圧は起きるのにつらい。

「レイン」

「なんですか」

「食材買ったら本屋付き合ってくれ」

「いいですよ」

レインは笑う。

「昨日買った三冊はもう読み終わってたんですか」

「ああ」

ケイの部屋となりの部屋は本でいっぱいである。ケイは寝るところ以外は全部本という環境でないと眠れないらしい。一回読んだ本はほとんど覚えていて。あおと同じで、記憶力が抜群にいいのだ。

「そのうち家が本でつぶれますよ」

「まめに古本屋に持ち込むか」

「今着払いで本を送れるところがあるらしいですからそれで送ったらどうです」

「そうなのか」

ケイは言いつつもご飯を食べる。

「そんなに急がなくてもまだありますよ」

「うん」

二人で食べているとなんともなく恥ずかしい。

「レイン」

「なんです」

「お前大学のほうは？」

「今日は午後からの授業です」

と答える。

ケイはレインのことが好きだったが。レインがケイのことを好きかどうかはいまだに聞けずにいる。一緒にいられる時間は短いのだからとは思うものの。

「遅刻だ」

「ごはんは？」

「食べていきまっす」

たくやが走り込んできた。

ケイはなんとなくほっとする。

「はい、ごはん」

「いただきます」

「あおいは？」

「もう出ていきましたよ」

「相変わらず早いなあ」

「たくやくんは低血圧だって聞きましたけど」

「あゝうん。そうなんだ」

低血圧じゃしょうがねえよとか自分でぶつぶつ言いながらたくやがごはんを食べ始める。いつもの食卓の風景だ。

「親父は」

「もう読経に入ってます」

「俺が一番最後か」

「いつものことだろ」

ケイが笑う。

「そうだけどさ」

たくやは一時間目ぎりぎりに学校に出ていく。昨夜はあおいにしっかりと勉強を叩き込まれた。

「なんか頭が良くなつたような気がする」

気のせいだろうが。でも多少は進歩した。どうやって努力すればいいのかがわかってきておもしろいのだ。

「なんかあおいに勉強教えてもらったら勉強できるようになる気がする」

レインがほほ笑む。

ケイが笑う。

「勉強頑張ってください」

「うん」

考えてみれば、毎日呪文を覚えていて、呪文は完璧に暗記しているたくやだ。やろうと思えばできないことはないだろう。

「俺よりは少なくとも勉強できるだろ」

ケイが言う。

ケイは数学とかは全然できないが、英語とフランス語はペラペラだとたくやも聞いていた。大体うちの住人は胡散臭い人ばかりだよなと思う。たくやもその一員なのだが。

「寺を継ぐつもりはないし」

とたくやが言う。

「そうですね、寺はあおいさんが継いでもいいですし」とレインが言う。

「そうだな。あおいのほうに向いてると俺も思う」

たくやがしみじみ言う。

寺は、墓がない。檀家もない。考えてみれば変な寺だった。

結界を張り、妖怪たちの通路を作りここで食い止める役目を果たしているような気がする。しのぶのところに来る客も変だ。時々なんかやたらとえらそうな人が来たりとかするし。

たくやは思う。考えはじめれば変なことだらけだ。

「まあ何にせよいつてきます」

「ごはんを食べおわりたくやはそう言うのと走り出す。

「低血圧の割に走るの早いですね」

「ああ、もうすこし早く起きればいいんじゃないかと俺は思うが」

レインとケイが二人でそんな会話をしていることなど知らず、たくやは学校に向かった。

「黒木さん」

「はい」

あおいの本名は黒木あおいという。

「この問題はわかりますか」

「ええと。13ですか」

「はい正解」

前に出て式を書いて。と言われて出ていく。あおいは勉強は好きでもないし嫌いでもないのだが。まあ、あやかしと戦うよりは楽だし。とは思う。漠然と先生になってみたいとは思っているのだが、別にこれになりたいという強い動機があるわけではない。読書も好きだが、ケイみたいにかくさんは読んでいないし本を買うのはほとんどない。図書館の本を利用している。大体小遣いも月三千円でそこから貯金までしているくらい金を使わない。服もさほど持っていないわけではなく、それでも最近は女の子らしい事にも興味を持つようになり、舞とケーキバイキングに行ったり一緒に服を買いに行ったりしている。

「では次の問題に行きます」

授業は進んでいく。

授業の最後に宿題はやってきたかなと先生が言う。あおいは宿題をやってきてあった。バインダーを出すと、宿題のプリントをはさみであるのを出す。

「はいじゃあ、後ろから集めてきてください」

と言う声に、あおいが違和感を感じてそちらを見る。誰も気づいていないが、あおいの周りに結界が張られたのがわかる。

「何か用ですか」

あおいは低く声を出した。眼鏡をとる。これだけでも退散する霊は多いが、これは普通の霊じゃないとあおいは直感した。

「お前たちがいくら退治しても代わりはいくらでもあるんだ」

と。少年の姿をした何かが語るのをあおいは見た。

「どういうこと」

あおいが言うとも結界が消える。

「何が言いたかったんだろ」

あおいがつぶやきつつ眼鏡をまたかけなおした。

「最近またぶっそうだね」

と、舞がソフトクリームを食べながら言う。

「そうだね」

やはり同じ牛乳ソフトクリームというソフトクリームを食べつつ昇も言う。

「ケイさんが、アスリートを殺して鬼に仕立てたのがいるんじゃないかって言ってた」

「そういえば連続してなくなったことあったよね」

と舞が言う。アスリートの筋力と精神力を宿した鬼。考えたくもない。

普通の人間が鬼になったものでさえ、苦勞するのに。

「ノルディックファームのアイスって高いけどおいしいよね」

全然脈絡ないけどさ。と昇がまた一口ソフトクリームを食べた。

「うん。でも」

「でも？」

「太りそう」

「時々食べてるだけならたぶん大丈夫だよ」

と根拠なく昇が言う。

「私が太っても好きでいてくれる？」

「もちろん」

昇は笑った。約束だからね。と舞が言う。

二人で手をつないで帰る。

舞の家の前で分かれて、昇は自宅に帰る。昇は高校生になっても弓道続けるつもりだった。

昇は手をのばして弓を引くポーズをとる。弓が現れた。矢はない。「やめた」

ふっと弓がなくなる。

最近の昇は弓のことと舞のことしか考えていない。実はお嬢様の舞を嫁にもらうにはしっかりした会社に勤めなきゃならないから、勉強もしっかりしようとか、舞を中心に世界が回っている。幸せだ

った。

舞は帰ると着替える。普段着ているのはふわふわのフリルのついた服である。母の趣味だ。舞の母親は霊能力者で、今までも何人もの人を見てきた人だ。

父親はいくつかある会社の社長で、毎日飛び回っている。

「舞、昇くんは」

「今日は家に帰るって」

「舞」

「はい」

「いい、男はこれだっと思ってたら奪うものよ」

「はい」

舞の母親はおっとりとした舞を心配する。

霊能力は視える能力だけ受け継いしまった舞を昇が守っていることを母親は分かっているようだ。

舞は、昇のことが大好きである。一目ぼれだった。舞が襲われそうになっているときに助けてくれた時に初めて名前を聞いた。ずっと舞さんのこと見てましたって言われて本当にうれしかった。

「昇くんは私と結婚してくれるってずっと言ってるの」

と舞は言う。

「そう」

母親が笑う。

「笑わないで」

「ええごめんなさい」

かわいらしいカップルねと母親に言われる。昇はずっと一緒にいるように言っている。舞は昇を信じているし、すでに校内では公認カップルだ。

舞が不思議で仕方がないのはたくやとあおいの関係だった。たくやもあおいもずっと一緒にいることをお互い信じているのに言葉に

出さない。と舞は思う。二人の間に何の約束もないのに不安にはならないのだろうかと思う。あおいにたくやのこと好きなのって聞いたことがあったが、真っ赤になってうつむいていたから好きなんだろうと思う。たくやには昇が、あおいのこと好きなのかって聞いたらまあそりゃあ好きなんだけどかなんとか言ってごまかされたらしい。煮え切らない二人をなんとかくつつかせようと思ってるのが最近の舞である。

「今日のごはんは何？」

お手伝いさんに聞きに行く。

「今日は日本食ですよ」

とお手伝いさんは答える。朝と昼は母が作るが、夕食はお手伝いさんが作ることが多い。家にいれば母の霊能力で守られているので家の中には変なものが出たことはない。母は毎日夕食の時間ぎりぎりまで結界を張りなおしている。レインさんみたいに札を書ければなあと舞は思うが、札を書いてもそれに込めるほどの霊能力はない。視ることと力を推し量ること、弱点を言い当てること、舞にできるのはそれだけだ。

「ケイさんがよく歯がゆいっていうけど、私もそうだな」

と独り言をつぶやきながら自室に戻って携帯を見た。昇からメールだ。

「今日も楽しかった。明日も楽しく学校行こうね」

か。うきうきして返信する。

ずっとこんなふうに一緒にいられて、好きでいられたらいいと思う。舞の両親は全然違うことを仕事にしてそれぞれその世界で一流になって、その上でお互いを愛し合って結婚を決めたのだという。浮気なんてしたことがないし、たまに二人でデートと称して出かけてしまうことだってある。舞にとって理想の夫婦とはあんな感じですつといられることだと思う。

昇に返信してしまうと、舞は椅子に腰かけて今日の日記を書き始めた。

日記には毎日の出来事が書かれている。今日はめまぐるしい一日だった。

調子も悪くなったりしたけど。大丈夫だったし。うん今日も良い一日だった。と書く。

「明日の宿題をしよう」と

舞は宿題のノートを出した。

第三部（後書き）

よんでいただきありがとうございます。

第四部（前書き）

日常を描けていればいいなと思って書きました。
読んでいただけると嬉しいです。

第四部

レインは急いでいた。

授業が終わり、走って電車に乗り込む。なんとか潜り込めた。電車は帰りの学生でいっぱいである。立ったまま外をなんとなく見ながらゆられていると不思議な気持ちになった。時々起きる感覚である。レインはハーフだったが、あまり気付かれたことはない。髪は黒く、目も黒いからだ。日本人の母にイギリス人の父を持つ。大学は日本の大学に行きたくてイギリスを出た。札を書けるのは幼い時からだった。守護霊が教えてくれたのだ。その守護霊の声は、ケイと出会うと消えた。

覚えなければならぬことはすべて教えたと言が残して。

下宿先にとしのぶの寺を勧められて、住んだ近所にケイが住んでいた。ケイと出会った時、このために日本に来たのだとレインは思った。

がたんと電車が駅につき、乗り換える。

今度は始発だ。座れる。

レインは手帳を出した。明日の授業の予定を書き込む。今日は少し家でも勉強しなければならぬだろう。レインは大学では留学生の枠でなおかつ特待生として通っている。特待生だとお金がもらえるのだ。寺の下宿代はそこから出している。

家計簿を二つ出した。

寺の家計と、自分の家の家計、両方を任されている。きちんと金銭の管理もする。

「あとは寝る前に札を三枚書いて」

と呟いて、足もとに何かがあることに気づいた。

キツネだ。とレインはとっさに思う。どこから連れてきてしまったのだろう。すりすり足もとに寄ってくる。まだ子狐の霊だ。親からはぐれたのかと、レインは思い、靴の中になにかが入っていたふりをしつつ狐を抱き上げる。

あなたのところで育ててやってくれ。と耳元で声がした。この声には聞き覚えがある。学校の裏にある祠の主の声だ。分かりましたとレインは口に出さず思う。

キツネはレインのひざの上で丸くなってくうくうと寝始めた。

「で、連れてきたのか」

ケイがなぜか警戒するように言う。

「どうしたんですか」

「いや、昔管使いにひどい目にあわされたことがあったんだ」

管使いとは、狐の霊を使って霊力を行使する者の総称だ。

「苦手なんですか？ こんなにかわいいのに」

「いやかわいいことはかわいいんだが」

おそろおそろ触る。

「何連れてきたんだ」

たくやが覗き込む。ケーンと小さく鳴く。

あおいもこんな小さいきつねを見るのは初めてだと、じっと見つめている。

あおいは力の大部分を眼鏡で封印しているが、見ることはできる。かわいいとあおいがつぶやく。

「しっかりしたキツネだな、霊格も高い。結界もなんなくクリアしているしな」

ケイはそう言うと、今日試し切りで使った竹を差し出した。中にすると入っていく。

「これでしばらく飼えばいい」

「ありがとう。とりあえず部屋に置いてきて、夕食作ります」

そのために急いで帰ってきたのだ。

「今日の夕食はカレーですよ」

たくやとケイが万歳した。

ちなみにカレーの具はトマト、ニンジン、じゃがいも、たまねぎ、鳥の手羽元である。

夕食を食べていると、狐がレインを探しにきた。

どうもレインを母親だと思ってる節があるとケイが言う。レインもそれがいやでないらしく、かわいがってやる。

「いろいろ覚えさせてあげたほうがいいんじゃないか」とケイ。

「ごはん食べるかしら」

とあおい。

「カレーを食べるかなあ」

とたくや。

「まあとりあえず席をひとつつくってあげなさい」としのぶ。

客間にあつた座布団をひとつ置いてやるとそこに横になる。かわいさかりの狐だが、しつけはしっかりしている。野狐ならいたずらのひとつやふたつするところだが。

「どこかの神社の使い狐の系列かなんかかなあ」

たくやが言う。

「ああ、そうかもね」

あおいが言う。

「学校の裏手に小さな祠があって何回かお参りしてるんですが、この神様に頼まれたんですよ」

レインが言う。

「うちは寺だけだなあ」

とたくや。

「寺に神様が祭られるのはそんなに珍しいことじゃない」
ケイが言う。

「日本って本当におもしろい宗教形体してますよね」
レインがそう言う。

「ああ」

ケイが返事した。

たくやがカレーをひとさじすくって狐の前に出した。

「カレーは興味ないみたいだな」

黙っていたしのぶがカレーを食べ終わって「ごちそうさまと言って立ち上がる。

「今日は少し出かけてくる。明日には帰ると思うが」

「行つてらっしゃい」

あおいが言う。

「どこに行くんだ」

とたくやが言う。

「聞かない方がいいだろう」

「じゃあ聞かねえ」

と送り出した。

しのぶは電車に乗っていた。

ふた駅のつて降りる。

「ここか」

金融業者の入っているビルに着くと中に入っていく。

「いらっしゃいませ」

「ここにいる林さんという人と話したいのだが」

「少々お待ちください」

待たされて応接室に通された。

「林です。わざわざなんで出向いてきたんですか」

昼間に来たセールスマンだ。笑う。

「中野くん、お茶はいいからこっちにしばらくこないでくれ」
「はい」

中野と声をかけられた受付嬢がひっこむ。

「金を借りにきたわけではない」

「何をしにきたんです」

「話をするために来た。その闇を飼い続ければ元に戻れなくなるぞ」
「そんなことわざわざ言われなくても分かってますよ」

僕にはもう何も残っていないのです。だからこのまま闇の世界の住人と暮らすほうがいい。

林はそう笑う。

「そうか、残念だ」

しのぶはそう言っていると、数珠を取り出した。

「抜うつもりですか」

「いや、封印する。すでにお前はもう半分闇に飲まれているからな」

「無茶を。ここがどこだと思ってるんです。ここは寺ではない」

「わしももう死んでもかまわないとずっと思っている」

「く」

呪文を唱え始める。

「縛」

男は床に転がり体をくねらせて苦しむ。やがて動かなくなり、起き上がった。

「お礼を言うべきですね」

と林は起き上がって言う。メガネをかけなおした。

「こんなにすっきりした気分はありません。でも闇を封印しても光があれば闇が濃くなるように、また僕は刀を狙いますよ」

「かまわん。何度でも封印する」

林は笑った。

「おもしろい方ですね」

林はそう笑う。外に出たついでだとしのぶは言い、立ちあがる。
「送っていきましょうか」

「いやいい」

これからのしのぶは墓に行くつもりだった。

亡くなった妻の墓。

亡くなってから年に一度だけまいりに行く。

「今日は命日だな」

林に聞こえるか聞こえないかの声でしのぶはつぶやいた。

しのぶは妻の墓に参る。以前住んでいた近くの寺に納めてもらったのだ。そのあと今の寺の住職になった。夜中の墓地は静かなものだ。静かに線香を立て、近くのデパートで買ってきた花を挿す。

死んだ者は生き返らない。言葉を交わすことももうない。霊になつて出てくることはたまにあつても切れ切れの言葉だけ聞こえる程度だ。しのぶは靈感はそんなになかったが、鍛練でここまで来た。本当は妻のあとを追つて死のうと思つたこともある。だが。大きな集団が動いていることを知ると、生きてたくやを守りながらそれと戦うことを選んだ。たくやがもう自分の手で守らなくても大丈夫だと思つた時、しのぶは自分の役目は終わったと思つた。

「早くお前のところに行きたい」

と呟く。

何を弱気なこと言つてゐるの。と妻の声が聞こえたような気がした。

「たくや」

「なんだ」

「今日の復習と明日の予習するよ」

「おう」

たくやは返事すると宿題も一緒に持つて、英語のノートを持つて降りてくる。

いつもごはんを食べている机で二人で勉強する。

「ええと。私も勉強があるから全部見てあげられないけど、英語はノートをこつやつて書いて」

と言うと、自分のノートを出す。

「前と同じようにすればいいんだよな」

「うん」

で、練習する時はまず英文を何度か書いて練習して、次に隠して書いてみて書けなかったところはまた何回か書いて覚えてまた日本語見て書いて。ってやってくと覚えられるよ。という。

国語の漢字書き取りテストもあるのでそれも覚える。

「今度のテストの範囲はきっちりやって成績上げていかないと」

「そうだな」

「みんなも勉強してるから、頑張らなきゃ」

あおいは言う。がりがりと書きながらたくやはふいにあおいを見た。あおいは寺では眼鏡をはずしていることが多い。霊がない環境だからだ。近くにあるその顔は見慣れてはいるけれど綺麗で。たくやは自分があおいを好きだと自覚する。別に顔から好きになつたわけじゃないけれど、たくやは本当にあおいがかわいいと思っていた。

「どうしたの」

動きを止めてこちらを見るたくやにあおいは聞く。

「なんでもない」

たくやは誤魔化して手元のノートを埋め始める。

漢字は広告の裏とかいらぬ紙に漢字を書いて覚えていったん自分でテストしてみても書けなかったところを重点的にやって、全部覚えられたら明日の朝もう一回テストしてみるといいと思うよ。とあおいは言い、たくやはそうかと言いつつ漢字のノートを開く。

「一ページ埋めてくるのが宿題で出てるんだ」

「じゃあ、一回問題集を解いてノートにたくやの考えた回答を書いて、答え合わせして間違つた漢字と書けなかった漢字を練習すればノート一ページなんてあつと言う間だから」

あおいは言いつつ自分の宿題のプリントを始める。理科のプリントだ。

「私は暗記系は得意だけど数学系が弱いから」

「そうなんだ」

「うん」

なんでもわかってると思ったとたくやは言おうとしてやめる。

あおいがどれくらい努力して今の学力を保っているか知っているからだ。

「数学は先生に聞いてやろうと思ってる」

とあおいが言う。

「高柳先生か？」

「うん」

「あの先生教えるのうまいよな、俺もあの先生の授業になってから数学赤点なくなったもんな」

「たくや」

「なに」

「今度大量赤点とつたら親呼び出しかもしれないよ」

「そうだった」

前回のテストでも追試を受けていたのだが、今回も追試がたくさんあるようなら親に来てもらうと担任から言われていた。

「あおい」

「ん？」

「俺私立の高校行くから、お前同じ私立で特待生になればいい」

「その私立もたくや危ない」

「そうなんだよな」

「これからみんなも勉強するから、頑張っても成績が上がらないかもしれないし」

とあおいが言う。本当にその通りだ。三年生になって部活がなくなるから頑張りに出す人も加わってくる。特に二人が通う県内の高校はどこも内申点重視で、テストの点数がどれだけよくてもふだんの成績が悪ければ落ちる。

「脅すみたいだけど、しっかりやらなきゃ」

「そうだな」

たくやはあおいの言葉に素直に頷く。本当に先生みたいだなとたくyahは思う。

「学校の先生向いてるよなあおい」

「でも私、人前でしゃべるの苦手だから」

「慣れれば大丈夫だろうと思うぜ。それよりも教えかたが上手いし、いい先生になれると思う」

「そうかな」

「ああ」

たくyahは答えた。寺を継ぐのもいいと思うけどな。とたくyahは言う。

「寺はたくyahが継ぐんだと思ってた」

「別に親父は決めてないみたいだし、俺は普通の会社に入りたい」

「そうなの」

「ああ。朝起きるのは苦手だけだな」

たくyahは言う。

「俺は呪文を唱えることはできるけどな、寺でじっとしてる方じゃないからな」

「そうだけど」

「まあ親父がどう言うかだな」

あくびをひとつしてたくyahが言う。

「眠くなってきた」

「あと一息だよ、宿題たまには全部出したほうがいいよ」

「なんで宿題出していないの知ってるんだ」

「呼び出しくらったのを職員室で見てた」

「親父には言うなよ」

「言ってないよ」

とあおいは言う。しのぶさんは忙しそうでこのところしゃべったこともない。とあおいは言う。

あおいはたくやの父親のことはしのぶさんと呼ぶ。

「親父は説教はしねえけど、怒ると怖い」

と言う。

「別に勉強のことでは怒らないと思うけど」

「でも静かに怒るだろ」

「うん」

「それが怖いんだ」

たくやは言う。

たくやにとつてしのぶはたった一人の父親だ。家族は増えたが血のつながった家族といえは一人しかいない。親戚づきあいもほとんどなかった。レインは親戚らしいが。

大体秘密が多すぎるんだうちの寺は。とたくやは思う。大きくなったら教えてやろうと言われてうやむやにされるのがいつものことで、たくやはそのうち気にしないように努めるようになった。呪文をなぜ覚えなければならぬとか、そういうこともいつも思っていた。そしてあおいに見えて自分に見えない霊たちの声が聞こえるようになるまでたくやも頑張ったのだ。たくやの持っているその能力は生まれつきの靈感ではない。長い休みのたびに山にこもらされたりした結果だ。小学校のころも宿題の出せない生徒だったが、中学になっても宿題の出せない生徒なのは仕方がないといえた。

「確かに怖いけど」

しばらく何も言わず、ただ、先生に迷惑がからないようにしなさいとは言われる。宿題は寺の行事で出せませんと先に言うようになった。あおいは寺の行事があってもきっちり宿題も出していた。たくやは山籠りさせられたが、男しか入ってはならない山の中で。あおいはそれを免れて、早くたくや帰ってこないかなと思いつながら家できっちり宿題をして、あさがおの日記も毎日書いた。そんな小学校時代だった。

二人は黙りこんでしばらく宿題をする。

「こんばんは」

レインの声だ。

「ジュース買ってきました。飲んでください」

と、オレンジジュースのペットボトルを二本置いていく。

「勉強頑張ってくださいね」

「ありがとうおやずみなさい」

「ありがとう」

二人は差し入れをありがたく飲んだ。

次の日たくやは宿題を出して、珍しく教室で発言した。英語の発音の読みの宿題である。つかえつつかえ言えば成績につけてもらえる。

「がんばったな」

と先生が言う。そんなことを言われるのは初めてで、たくやはええとかああとか答えた。

小テストといって、授業の最終15分くらいでやるテストも満点だった。

やればできるんだって思えたら、勉強が楽しいとまでは言わないまでもやってもいいかなと思うようになった。

「その調子で頑張れ」

と先生に、たくやは言われて気を引き締めた。

授業後は文化祭のしたくをする生徒が多少残る。

「おい」

舞と昇が来る。

「今日は一緒に帰ろう」

「わかった」

「あおいは？」

「あおいちゃんも来るよ」

たくやはあおいがとても大切だったが、それを全面に押し出すような人間ではない。舞と昇のように普段から手をつないで遊びに行ったりする仲にはなかなかなれそうになかった。

「恥ずかしいのか」

とふいにたくやは聞いてしまう。

「何が？」

「いや、手をつないで帰るの」

「どうってことないよ。舞ちゃんが他の人に取られないようにしっかり手を繋ぐんだ」

と、昇は言う。

舞は嬉しそうににこにこしている。

「まあ、お互いがいいならいいけどな」

どうにもあつあつでたくやは当てられてしまう。

「あ、きたきた」

「おまたせしました」

あおいがそう言う。

「ちょっと分からないところを先生に聞いてきた。今日宿題出てないし早く帰る」

「そうなの」

「うん」

「あおいちゃんでもわからないことってあるんだ」

「あるだろそりゃ」

とたくや。

「あります」

ときつぱりあおいが言う。

「勉強でも人生でもわからないことだらけ」

とあおいが答えると、そんなもんだと全員で納得して帰る。

それなりに充実した日々に、闇がそろりと寄ってくる。
そんなことをケイが思う。

「どうしたんですか」

「ん」

「楽しそうです」

「ああ、俺はもめごとが好きだからな」

「悪趣味ですね」

「まあな」

「何か起こりそうでわくわくしますか」

「そうだな」

レインはケイの発言をとがめない。

「何が来るとしても」

「はい」

「この命がつきたとしても」

それはそれでいいと俺は思う。とケイは言った。

「ケイ、あなたは」

「なんだ」

「鬼でなくなったことを後悔してませんか」

とレインは言った。

「お前と同じ目線でものが見たくなっただ。死んでもまた生まれ変わる人という種族にまた戻りたくなっただ。それだけだ」

「そうですか」

「ああ、お前が気に病むことじゃない」

とケイは言いきった。

「ちよつと見てきますね」

「何を」

「札です。結界を張り直しているんですよ」

レインは言いながら札を出す。

「寺の結界がああも簡単に破られるとは思わなかったな」

「ええ。それで」

「なんだ」

「ちよつとこれを預かってください」

と竹筒を差し出す。

「苦手なんだがな」

「すみません。ほかに頼める人いないですし」

と、狐の入った竹筒を受け取ってケイが黙ってそれを横にした。
キツネは、レインのパートナーであるケイを父親だと思いだしているらしく。それなりにケイにもなついている。

「名前とかつけてやらないのか」

「返す時に情が移るからつけたくないですね」

言いつつ部屋を出ていくレイン。

「もうちょっと待ってろ、すぐ帰ってくるからレインは」

と顔を出した子狐に声をかけてやる。

あぐらをかいたケイの足に頭をのせて、くうくう寝始める。

「道成寺」

「はい」

「笑いたいなら笑っていいぞ」

「すみません」

ケイの影で笑いをこらえている道成寺にケイは言う。

道成寺と旅をしていたころ、管使いの男に会った。名前は覚えていない。

ケイはその男と戦ったが、殺すつもりはなかった。

その時、使っていたのは大きな狐だったが、懷から出た竹筒から子狐が出てきて懷に飛び込んできて、どことわず噛まれた。

で、あざだらけになって逃げたのだ。

「あのときは散々な目にあつたな」

と呟く。

寝ている子狐は本当に安心しきって眠っている。少しまだおっかなびっくりだが、ケイはこの小さな動物霊をかわいいと思うようになっていた。

子供ができればこんな感じなんだろうか。とケイは思う。作るとしたらレインとだが。と考えて顔を赤くする。

道成寺はひとしきり笑ったあと影に戻っていった。

「いつまでこうしておけばいいんだ」

とケイがつぶやいた。

第四部（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

第五部（前書き）

ちょっと長いですが、一気に置きます。こころして読んでください。

第五部

「ただいま」

「おじゃまします」

今日は舞の家で勉強会をすることにした。テストが近いのだ。

「お帰りなさい」

お手伝いさんが言ってくれる。舞の母親は離れで祈祷でもしているのだと舞が言う。

リビングの机で全員宿題を始める。まず宿題をやって、それからテストの勉強だ。

あおいは黙々と宿題をやっている。あおいはテストが割と好きだ。勉強してきたことを出しきって答えていく時間。スリリングだと思う。授業よりも何倍も好きだという。舞はそんなものかしらと思う。

「ん」

とたくやがつぶやく。

同時にあおいにも何かが感じられた。メガネをはずす。

「祈祷所から何か出てきたみたい」

と舞が言って立ち上がる。宿題どころではない。

「ちよつと見てくる」

「僕も行くよ」

「みんなで行ったほうがいいかもしれない」

眼鏡をしたあおいが変だと感じるほどの異変だ。

「行こう」

とたくやが言った。

祈祷所といっても小さなプレハブの家が建っているだけだ。

「お母さん」

舞が叫んで中に入り動けなくなる。

黒い穴が空間にあいていて、太い赤い手が舞の母親の腕を掴んでいた。

あおいが飛び込んで矛を突き刺すと、手が離れた。

「おばさんこつちへ」

たくやが飛び込んで舞の母親を引き寄せる。

昇が弓をひきしぼり、黒い空間に打ち込んだ。

黒い空間が消えていく。

「大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫」

「お母さん」

舞が母親に抱きつく。

「ありがとう」

全員で息を撫でおろした。

「今のはなんだったんだ」

たくやは言う。

「心あたりはありますか」

あおいが舞の母親に聞く。

「除霊を頼まれてる人の背後を視ていたの。そうしたら急に手が出てきて」

舞が動かなくなった。

「どうしたの舞」

がたがたと震えている。

「なんかおかしいよ、ここ出たほうがいい」

昇が言う。全員そうだなと出る。

外に出ると、風が吹いていた。生臭い風だ。

「あれは」

あおいが見た少年が庭に立っていた。

「知ってるのか」

「知ってるっていうか一回授業中に接触してきた子」

「みなさんこんにちは」

少年は言った。

「お前何をたくらんでる」

「たくらむなんて滅相もない」

たくやの言葉に少年は笑う。

「ただ僕はユートピアを作りたいだけだ。僕の。僕だけのくすくすと笑う。」

「ユートピア」

くるってるよこの子と昇が小さく言う。

「だから邪魔なものは全部消そうと思ってる」

「だからここを襲ったのか」

「手始めにね」

プレハブの建物がぐしゃりと音をたててつぶれた。

「お母さんは下がってて」

と舞が言い、立ちふさがる。

「ああ。壊してしまったね」

と少年は呟く。

「人間業じゃないな」

とたくやが言う。

少年はにたりと笑った。

彼の正体を見極めようと舞が力を使う。

「人として生まれて人として扱われなかった者と呟く。」

「そんなものはただの僕の過去だ」

少年は言う。

「かわいそう」

と舞がつぶやく。

「かわいそうだと」

少年は笑う。

舞がぼろぼろと涙をこぼし泣き出した。

「大丈夫舞ちゃん」

「うん」

「僕は人間なんてどうでもいい」

お母さん僕を愛して。

「僕は僕の世界を作るんだ」

お母さん、ぼくを見て。僕に気づいて。あおいにもはっきり聞か
えた。

あおいが矛を持った。

「来る」

波動を感じる。また鬼だ。

「なんでこんなに鬼が」

たくやは言う。

「この子が作ったんだわ」

と舞が言う。

かわいそう。

とも言っ。

「同情なんていらないね。僕は僕が生きたいように生きるだけさ」
強い怒りと悲しみしかない。

そんな波動に毎日さらされていれば心は暗く閉ざされてしまっ。

「この子、まだ生きてるんだ」

「生きている？」

「うん急がなきゃ」

舞が言う。

少年の姿がかき消える。

「まずはでもこの鬼をなんとかしなきゃね」

「そうだな」

あおいの言葉にたくやが答える。

穴から出てきた鬼に対峙する。穴が消えた。

「いくぞ」

舞が、母親の近くに避難する。

たくやは呪文を唱え、あおいが矛を突き立て、昇が弓を引く。

「やったか」

鬼が倒れて、黒い塊になって、やがてさらさらと消えていく。

「早く行かなきゃ」

「舞」

「舞ちゃん」

「どこに？」

とあおいが聞く。

「あの子、まだ生きてるの。母親にぐるぐるに縛られて家に転がされてるのが見えた」

「なんだって」

「たぶん幽体離脱のできる力の強い子なんだと思う」

生き霊は消すことはできない。

「早く行ってあげなきゃ、死んじゃう。死んじやったらもっと大きな力になっちゃう」

舞が言う。

「急ごう」

「どう行けばいいかわかる？」

舞の母親が言った。

「車いるなら出すわ」

と言う。

「ありがとうお母さん」

方向がわかるから、大体大丈夫だと思う。

「急ごう」

全員が車に乗り込む。

「あそこ」

マンションの一角を舞が指さす。

うわ。たくやが思わず言う。黒い瘴気が見えるのだ。

「あんなところに人がいるの？」

あおいが言う。

「うん」

「まず俺が瘴気を払う」

とたくやが呪文を唱え始める。

黒い霧のような瘴気が、薄れる。

「中に人がいるみたいだ」

「すみません」

チャイムを鳴らすと女の人が出てきた。

「なんですか」

昇がすきをついて中に入る。

「右の部屋！」

舞が叫ぶ。

「あなたたちなんですか」

「うわ」

少年が黒い瘴気をまとして、ビニールひもでぐるぐるに巻かれて転がっていた。

骨と皮しかない。生きているのが不思議なくらいだ。

「大丈夫」

今助けてあげる。と言うと、少年はうつろな目をして舞を見た。

「出て行ってちょうだい！」

母親らしき女が叫んでいるが、自分がしたことがどんなことなのか分かっていないのだろう。警察と救急車。

と舞が叫ぶ。

電話にたくやが飛びついた。

「もう大丈夫」

キッチンにあったはさみでビニールひもを切りながら、舞が繰り返す。

返す。

「大丈夫。大丈夫」

あおいには母親がいない。父親もいない。でもこんな親でなくて良かったと思う。たまに孤児院に先生を訪ねることがある。あおいは捨てられていた。警察でも親を探してくれたそうだが、未だに実の親には会ったことがない。こんな親ならいつそいないほうがいいだろう。とも思う。なぜ自分の産んだ子供にこういうことをしてしまうのか。

「救急車も呼ぼう」

昇が言う。たくやがかけはじめる。

「たぶんもう限界よ、水飲める？」

水道で水を汲んでくる。少年はゆっくりと飲んだ。

母親らしき女は座ったまま放心したようにぼんやり宙を見ている。

警察にどうやって説明すればいいのかわからないので、少年の母親を今度はいっぱって、下の駐車場で警察と救急車がくるのを見ていた。救急隊が部屋に入っていく、警察も向かうのを見届けて、5人はそこを出た。

「昼の番組とかでまた虐待のニュースが出るわ」

と舞の母親がつぶやく。

「とりあえず助かればいいが」

「うん」

少年が命を取り留めても、その後ろで何が起きているのかわからない。

舞の家まで来ると、少年が立っていた。

「もう体に戻る」

と少年は言った。

「あなたにユートピアを吹き込んだのは誰？」

あおいは言う。

いくら力が強いとはいえ、誰の力も借りずに鬼を作り出せるはずがない。鬼を作るのは簡単なことじゃないのだ。

「わからない」

少年は言う。

「あなたたちに助けられたのは礼を言う」

少年の後ろから光が包み込み、言う。

「お父さん」

少年の父親だったらしい。

「お父さんは亡くなってるのね」

舞が言った。

「うん」

「さみしい？」

「うん」

「お母さんもさみしかつたんだろうと思う」

子供は虐待されていても親のことをかばう。親は、自分が幸せでないと、子供が親より幸せになると攻撃するようになる。それが虐待だ。子供は親より幸せになるとひどいことをされることに気づいて、一生懸命不幸になろうとする。不幸の循環は止まらない。

「どうしようね」

体に戻るということは、一命は取り留めたと思っていいだろう。

舞の家に戻ってきて言う。

「壊れたものは仕方ないわ」

プレハブの家はぺしゃんこになっている。上から何かが落ちてきたような壊れ方だ。

「説明に困るけど、でも業者に入ってもらうしかないわ」と舞の母親は言った。

「今日はみんなで宿題とテスト勉強のつもりだったんだけど」

と舞が言う。

「いいわよ、勉強してて」

もう出ないでしょ鬼も。と言いつつ舞の母親がため息をついた。

「大事なものは置いてないから大丈夫だけど。まさかこんな大型の攻撃を受けるとは思わなかったわね」

と呟き、よし。と言う。

「お茶が入りましたよ」

と、騒動を知らずにいたのだろう、お手伝いさんがドーナツと紅茶のセットを持って現れた。

「お茶にする？」

舞の母親が笑う。

「私の分もあるかしら」

「奥様の分もありますよ」

初老のお手伝いさんの手作りドーナツだ。

「食べましょう」

と舞が言う。

「そうね」

と母親も言った。全員でテーブル席に座って紅茶とドーナツを頂いた。

「勉強がんばってくださいね」

とお手伝いさんが言い、全員ではいとそれぞれ返事した。

「私も頑張らなきゃ。とりあえず業者を呼ばないとね」

と舞の母親が言いながら立ちあがった。

「皆さんはゆっくりお茶しててね」

と言いつつ部屋を後にした。

「なんだと思う？ あおい」

「なにが」

「今回の事件の発端」

「ちよつと考えたけど、私もはつきりした答えは分からない」とあおいが答えた。

帰り道。夕暮れで赤く染まった空を見上げてたくやが聞く。

「今考えてるところまででいいんだ。考えを聞かせてほしい」
「うん」

と言って考え始める。

「まず、しのぶさんが急に刀を作ったこと」

「ああ、そういえばおやじさんのところに変なのが来てたな」

「そうなの」

「ああ」

「じゃあそれも考えに入れないと。どんな変なのだったの？」
聞かれてたくやが説明する。

「ふうん」

「で、刀は霊力の高いケイさんが持つことになった」

「うん」

「呼び水の霊気は妖怪を閉じ込めることで作ってる。その妖怪たちが全部いなくなってしまうってケイさんなら刀を維持できる」

「うん」

「で、次に鬼」

「そう。鬼」

たくやもおおいも鬼に対峙したのは、道成寺との模擬戦くらいだった。

「鬼をつくっていたのがあの少年なのかしら」

「そうじゃないのか」

「鬼を作るには儀式が必要だし時間もかかる」

「そうだな」

「でも私のところに出た少年はいくらでも作れると言っていた」

「うん」

「だからたぶん大きな何かが動いてるのだと思う」

「何か？」

「うん、何か。私にも分からない」

あおいが言った。

「何が動いているんだろうな」

二人は顔を見合わせる。

「たくや」

「ん」

「しのぶさんにきちんと話を聞いたほうがいいかもしれない」

「そうだな」

「お母さんのことは知ってる？」

「ああ、教えてもらった。お前は知ってたのか」

「たくやのお母さんの浄化を手伝ったことがあるから知ってる」

「浄化？」

「うん。妖怪に食べられた人は普通には成仏できないの。それでの妖怪からたくさんの霊を引きはがしたことがあって」

とあおいが答える。

「そうか、ありがとう」

「ううん。本当はたくやにやってもらいたかったんだと思うけど」

「うん」

「たくやはそのころ山籠りしてたから」

とあおいが言う。

「ずっと言わないでおいってくれて言われてたけど、もう言ってもいいと思ったから」

「ああ」

「ずっとお母さん、たくやのこと見てる」

「そうか」

「でも、その妖怪は退治できたわけじゃないの」

「ああ、それは聞いた。封印していられるだけだって」

二人は黙りこむ。

「親父は何考えてるのか俺にはさっぱりわからない」

「もつと会話したほうがいいかも」

「そうなんだよな、なんかまだ隠してることいっぱいありそうなんだよな」

とたくやがため息をつく。

「何にせよ帰ってからレインさんたちにも今日のこと言っただろうが
いいし」

「ああ」

二人はそれから特に会話もなく帰った。

「大変でしたね」

とレインは言う。テレビでは少年が母親に監禁されていたという
ニュースが流れていた。

「そうでもないけど。でも、何かが動いているという感じがあるの」
「そうですね。ケイもそう言っていました」

とレインは言う。ケイはそれが楽しいようだったが、そのことは
ふせておく。

「ただいま」

と声がした。しのぶだ。

「親父、ちょっと話があるから集まってくれ」
「わかった」

しのぶは何をしてきたのか、いつもは着物を着ているのだが出て
いくときはそういえばジーンズにトレーナーだったなとたくやはど
うでもいいことを思い出す。

「お帰りなさい」

ああいと言う。

「話とは」

「今日舞のところに鬼が出た」

とたくやが言った。

「そうか」

としのぶは言う。

「親父は何か知らないか」

しのぶは腕を組む。

「もう話したほうがいいか」

ケイクンも呼びなさい。とレインに言う。

「昇君と舞さんにも明日言っておくようにしてもらえるか」

「はい」

あおいが答える。

「まずはじまりの話しからするか」

いつもの話なのかはしのぶも知らない。鬼と人とが共存して
いたころの話だとは聞いていた。

ひとりの鬼がいたという。

「ケイさんみたいなの？」

「そうだな、ケイクンや、道成寺さんのような鬼や鬼だった人が普
通にいた時代だ」

「その鬼が一人の妖怪を好きになった」

「うん」

「その妖怪の女を、鬼はさらって妻にした」

だが、女は鬼を嫌っていた。

「そこで女が自分を好きになるように、鬼は頑張った。だが、女は
他の男を連れ込み、鬼はその男を毎日殺した」

「ひどい話だ」

たくやは言う。

「男があきらめるか、女が観念するかどちらかしかかった」

その二人がある寺の住職が封印した。

「その寺がうちの寺だ」

としのぶが言う。

「じゃあその二人がここに封印されているのか」

「そうだ。それを狙う鬼もいるようだ。鬼は力の強い鬼を取り込
み同化することで強くなる」

と外から声がした。

「ケイさん」

「レインさん」

二人が立っていた。

「知ってたんですか」

あおいが聞く。

「いや、ここがそうだと知らなかったが、そういう寺があることは知っていた」

ケイは答える。

「寺の真ん中に大きな封印を感じてましたが、まさかそんなことだとは思いませんでした」

とレインが答える。

「寺にいくつか封印があつて、何重にもなつてるところがあるけど、それですか」

とあおいが言う。

「そうだ」

としのぶが答える。

「刀はその鬼と妖怪を退治するために作られたものだった。ところがそれを持って刀鍛冶が行方不明になった」

としのぶが言う。

「その刀がどういうわけか今見つかった」

「どこから」

「寺の中からだ」

書置きがあつた。鬼と妖怪を退治する時に失敗した時が怖いから逃げると書かれていた。刀はここに置いておくと。

「それ、誰も見つけてなかったんですか」

レインがあきれたように言う。

「いや、見つけた人はいたんじゃないか。刀は使われた形跡があったからな」

ケイが言う。

「使つてはここに隠していたんじゃないかとわしも思う」
としのぶは言う。

「刀で辻切りを繰り返した者がいるようだ」

「辻切り？」

「通行人を切り殺すことよ」

とあおいが言った。

「うわ」

「霊がついていてそれを浄化するためにしばらく経をあげていた」としのぶが言うと、たくやは気づかなかったという。

「毎日読経してるなあとは思ってたけど」

と言いつつ正座を崩し、あぐらをかく。

霊がいなくなってから、刀を直した。

としのぶは言う。

「それから。たくやの母親のことだが」

「ああ」

「わしは普通の会社に勤めていた。寺を継ぐのがいやで逃げ回ってやつと好きな人もできて一緒に暮らし始めて、幸せな家庭だったと思う。たくやが生まれて、二歳の時だ」

「ああ」

「妖怪が来た。わしに流れる血を知った妖怪が」

「それで」

「ああ、妻は殺されて食べられた。たくやをかばってこと切れていた」

ひどい状態だった。としのぶは静かに言った。

「それから寺に戻って寺を継いだ」

何年もかけてその時の妖怪を5つに分けて封印した。としのぶは言う。

「私が手伝ったのはその時ですね」

とレインが言う。

「大量に札を書いてもらった」

「ええ」

「そしてそのあとひとつの封印を解いて、妖怪から霊を引きはがし

て浄化した」

「その時はあおいさんも手伝ってましたね」

「ああ」

「俺は何も知らねえ」

とたくやは言う。

「たくやはその時まだ力が足りなかったし見なくて良かったと思うよ」

と、あおいが言う。

「何を見たんだ」

「ぐちゃぐちゃになった人の死体」

「あおいさんはもろに見てしまいましたからねえ」

「わしもああいう状態だとはおもわなくてな。すまなかった」

「いえ、私は別になれてるんでいいです」

あおいは言った。

あおいはいろんな霊をはらっている。飛び降り自殺の霊なんかが浄化される前とかは本当に悲惨だ。

「それで、その妖怪と、二体のもともある妖怪と、三体いるわけだな」

とたくやが言う。

「そうのこと」

「そのうち、5つに分けた妖怪はこの裏山に封印してあるんだが、封印を解いて浄化させてしまおうかと思っている」

「まずはそこからですね」

「その妖怪の力を得れば大きな力になると思ってるのがたぶんいるな」

とケイがつぶやく。

「ケイ」

「ああ、分かってる。不安になればそこを突かれる」
ケイが続ける。

「でも用心はしとくべきだろう。たぶん、山の方の妖怪を浄化して

る間に寺に来る可能性もある」

ケイの言葉に

「もともと寺にいる妖怪と鬼は大丈夫なのか」

たくやがしのぶに聞く。

「そっちはレインさんに札を書いてもらっている」

「じゃあとりあえずは大丈夫なんだな」

と言うととりあえず安心はしたようだ。

「寺を守るのは俺がやろう。そのために刀を預かったということなんだろうからな」

ケイが言う。

「私は結界をはずす仕事があります。山の方に向かいます」

「頼んだぞ」

打ち合わせを済ませる。

「じゃあ、明日昇君と舞ちゃんには説明しておきます」

とあおいが言う。

「黒幕が出てくる」

とケイが言う。

「たぶん、これが正念場だ」

としのぶが言う。

「寺に封印されてるほうの妖怪と鬼の浄化は難しいんじゃないんですか」

「ああ、多くの命をまとって攻撃することができないからな」

「あおいでも無理か」

「何百という霊がくつついてもう離れない状態なんですよ」

札を貼るときに見ましたが。とレインが言う。

「少しずつ浄化していけばあと数百年で浄化できると思うが」
とケイが言う。

「何にせよ厄介ですね」

あおいが言う。

「刀で切るのも大変そうだな」

ケイが言う。

「昇君と舞ちゃんはこのポジションでやってもらってますか」
「山のほうだ」

「ケイさん一人で大丈夫ですか」
あおいが聞いた。

「俺は大丈夫だ。道成寺もいる」

ケーンとレインの腰からぶら下げている竹筒からも声がして小さな狐が出てくる。

「きつねは寺のほうに置いていくか」

「そうですね」

「ケイさんと留守番だよ」

あおいが言いながらきつねをなでてやる。

「かわいい」

「では解散ということだ」

「日曜日に決行する」

としのぶが言った。

日曜日はくもひとつない晴天だった。

裏山に上がる。

「気持ちのいい日ですね」

「こんなことでなければ」

とあおいが言う。

「そうね」

と舞が答える。

「まず一番先にここの封印を解く」
と、しのぶが地図を広げた。

「しめ縄が張つてある」

とたくやが言う。

「結界を切ります」

レインが言つて先頭に立つ。

複雑な印を結んだあと、大きく声を出した。

ぶつんと縄が切れた。

ごうつと空気が動く。

「来る」

あおいが言つ。

「5つに分けたつてどついう風に分かれてるの」

舞が言つ。

「みればわかるよ」

あおいが言いつつ矛を構えた。

黒い気体のようなものが立つて、もやもやとなつたあと男の姿になつた。

目がひとつだ。

「完全でないから、少しずつ欠けた姿になつて現れるの」

あおいが言いながら矛を構えた。

舞が後ろに下がり、レインとともにレインの張つた結界に入る。

しのぶとたくやが呪文を唱え始め、昇が弓を引いた。

昇の弓が数本の矢を矢継ぎ早に打ちこんでいく。早い。

妖怪は動きもせずそこに立っていた。

「反撃はしないのかな」

昇が言つたその時だつた。

目を閉じていた妖怪が目をあける。

また風が吹いて、矢が抜けて落ちた。

矛でできた傷からは血の一滴も出ず、妖怪はにたりと笑つ。

「ひるむな」

しのぶが言つ。

「持久戦かあ」

昇が言いつつもう一本弓を引く。また妖怪が目を閉じようとしているところに目を狙つて昇が矢を射る。

「ぎゃあああああ」

「目が弱点だったんだ」

とたくやが言いながらぼろぼろと崩れていく妖怪に声を止めた。
「そうなんだ」

「じゃあ前に封印を解いて浄化した一体も弱点があったのかな」

あおいが言う。

「がむしやらに攻撃してましたからねえ」

レインが結界を解いて言う。

「何にせよこんなのがあと3体あるのか」

「ああそうだ」

しのぶが答えた。

たくやがうんざりしたように声を上げる。

「形も違いますね」

「ああ」

次の結界に向かう。

「ここですね」

レインが結界を取ると、今度は片手のない着物の少女が立っていた。
た。

「子供」

と昇が言うが、あおいが先に動いた。

「急いで、昇君」

舞が言う。

「うん」

弓を引き絞り、手を離す。

矢が少女の胸のあたりに突き刺さる。じゅ。と音がして矢が溶ける。

「きりがない」

言いつつまた弓を構えた。

そのころケイは静かに本堂に道成寺とともに座っていた。刀を横

に置き、精神を統一する。

「そろそろ来る気がするなあ」

とつぶやくとふところに狐の竹筒を入れる。

「何かあったらレインのところに走るんだぞ」

と狐に言い聞かせつつ草鞋を履いた。

空はどこまでも澄んで青い。雲ひとつない空だ。

「こんなことで死ぬようなことはないと思うが、道成寺」

「はい」

「俺が死んだらあとは頼んだぞ」

「不吉なことを」

「いや、まあ本気でかかってもダメかもしれないからなあ」

何者が来るか分からないのだ。

「どちらにしろ寺を任されたんだ、俺たちはここで番をするしかない」

言っていると、風がふき始めた。

「来ましたね」

と道成寺が静かに言う。

二人は立ち上がった。

二人が対峙したのは一人の女だった。

「お前は」

「お久しぶりですわ。ケイ様」

女はそう言った。

結界がきしみ、力を失う。

「鬼が来るとは思っていたが」

「道成寺様もお久しぶりですわね」

と言いつつ女の額から角が生え、牙が口から生える。

「結界を解いて解放した力を得ようという魂胆だろう」

とケイは低く言う。

凶星だろう。女は低く笑った。

「そこまでわかっていらっしやるなら、いなくなってくださいさるとう

れしいわ」

「昔の俺ならな」

ケイもまた笑った。

「鬼の集団を作ったのもお前たちか」

「ええ、逃亡者のケイ」

「鬼の里とはもう縁を切った。逃亡者と言われようと反逆者と言われようと一向に構わないが」

お前こそ人間の男と駆け落ちしたんじゃないのかとケイが言うと、女はすいと真顔に戻る。ケイはもう鬼ではない。鬼の里には関係なくなつたのだ。

「お前は鬼のままだったんだな」

ケイがつぶやいた。

「人間など、くずだわ」

女の手にはナイフが握られていた。

ケイは刀を抜いた。

「人間に戻ったあなたにはわからない」

「ああ、わからなくていい。里が怖くて鬼から人間になれなかったのだろう」

ケイは言いつつ構える。

「下がっている」

道成寺にそう言う。

「俺はもう過去は振り返らない」

「そのようですね。戦う以外ないのですわ」
笑う。

女の顔は美しかった。

人間に戻って、守るものが増えた。年をとっていくことにはなかなか慣れないが、悪くないと思えるようになった。レインのおかげだ。

「同じ目線に立ちたい人間ができただけだ」

「私は鬼であることを捨てない」

「それもいいだろう」

ケイは言う。刀をすらりと抜いた。構える。

女は走り込んでくる。懷に飛び込まれる前に刀を振り下ろす。ナイフで女が刀を受ける。力では五分五分だろう。鬼であったころなら間違いなく勝てた相手だ。

ふ。と女は笑った。

「女のために弱くなりましたわね」

「ああ。でも後悔はしていない」

もともと優男の風情だ。後ろに下がるとナイフが滑る。その瞬間に刀を返し切りつける。

腹のあたりを切った。

返り血がケイの顔に飛ぶ。

「まだまだ」

と女は言う。痛みを感じているはずだ。

ケイのふところから飛び出した子狐が女の顔に青い火を噴いた。振り払う。

「っ」

やけどをしたところがどろりと溶けてくる。

「よくやった」

ケイが言う。

「目が、目が見えない」

女はそう言いながらよろよろと歩きだす。

「お前は俺を殺せない」

「なぜ」

「お前は今迷いがある」

「そんなものとうに捨てた」

「いや、捨ててない。好きだった男をふりきれていない」

「やめて」

「やめない。俺は命をかけて好きな女とともに生きる選択をした」
だが強くなれる関係でない恋愛など恋愛と呼べない。ケイは肉体

的には弱くなつたが、精神的には強くなつたと自分でも思う。

人間であること。

鬼をやめたこと。

ケイが人間であつても鬼であつてもレインは変わらないだろうが。

人は強い。そして弱い。

「俺は後悔していない」

「何がわかるのあなたに。私は死ぬのが怖かった」

鬼であれば生き続けられる。

「でもあの人がいなくなつた時、死ねばよかったと思つた」

そう言つと、ふらふらと歩きだす。

ケイはまた切りつけた。

女はひざをつくと、ごぼりと血を吐いた。死者から作られた鬼は浄化することもできるが、もともといる鬼はそういうわけにはいかない。永遠の命を持つ存在だ。

「私は殺せないわ」

「わかつている」

女を切れないという男は多いが、ケイはその点平等だった。男も

女も切るときは切る。

女はふいに黒い穴に吸い込まれていった。

ケイは生きたまま鬼になつた。稀有なそんざいだつた。鬼の里には鬼に連れていかれたが、肌に合わず、一人で生きているときに道成寺を助けた。それから道成寺は死んでからも鬼になつてあなたと一緒に生きたいと言い、今の形になつた。

「道成寺」

「はい」

「次が来る」

「はい」

「なんとかレインたちが来るまで持ちこたえてみせる」

刀を使うほどに体の中で煮えたぎるものがある。戦うことは生きること。そう思う。

「行くぞ」

二人が立つ前に、また新しく影が下りてきた。

レインはふいに何か分からない不安に襲われた。

「この結界が外れたら、先に下山していいですか」

「どうした」

しのぶが言う。

「ケイになにかあった気がするんです」

「行ったほうがいいよ」

舞が言う。

「こっちは人数足りてるからな」

たくやが言う。

「ケイ」

とレインがつぶやき、胸から下げているペンダントを握った。ケイからもらったものだ。

「最後の結界だ」

「よし」

「いきます」

レインが綱の前に立った。

「いくよ」

弓をひきしぼり、息をあらく吐きながら昇は言う。最後の敵は片腕がなかった。

レインが急いで山を降りた。

「ケイ」

寺について走る。

結界が破れている。ケイは？ とみれば、大きな鬼と戦っていた。レインは札を投げる。

「燃えろ」

と叫ぶと鬼に向かって投げた。

鬼が火に包まれながら何かを叫ぶ。もともと人間だった鬼。魂は人間だ。何か言いたいのかも知れないが、いちいちそんなことを考えていたらこんなことできない。

ケイが後ろに逃げる。

「レイン」

「大丈夫ですか」

「大丈夫と言いたところだが、危なかったな」

「良かった」

「次がまた来るぞ」

「みんながすぐに来ますから、それまで応戦します」

「奥の結界を狙ってるらしいな、複数来たら封印が解けてしまう可能性もある」

「そんなことさせません」

「ああ」

道成寺が構えた。ケイもかまえる。

レインが次の札をジャケットの内ポケットから出す。

「今封印が解けたらどうなるんだろうな」

ケイは言う。

「試してみるのはやめてください」

「しないさ」

ケイは言いつつ次の黒い穴があくのを見ていた。

「レイン」

「はい」

「俺はずっと戦ってきた。これから戦う」

「はい」

レインは答えながら穴が広がってまた鬼が現れるのを見る。

「奥の結界付近には近寄れないみたいだな」

「奥の結界は私もうかつに近寄れないほど強い結界です」

「お前でも無理か」

「ええ、私が半年かかってもやりおおせるか分からないような結果ですね」

「そうか」

ケイは唇を舌で濡らした。

「楽しいな」

ふと笑う。

「悪趣味ですな」

「悪趣味です」

道成寺とレインに同時にツッコまれてケイが黙る。

「いいじゃないか」

刀を振り上げて言う。

「こういう場面でなければ俺は生きている気がしないんだから」

と言いながら切り下げた。

鬼の左腕が切り落とされる。

「だんだん要領がつかめてきたな」

試し切りのついでのような。

「刀が馴染んできましたな」

道成寺が言いつつ一歩前に出た。

右腕をつかんでぐん。と振り回す。壁に激突させるが、鬼は数度

頭を振っただけで起き上がってくる。

レインが札を一枚投げた。

「切断」

とひとこと言うと札は横になり、刃物に変わった。鬼の首の半分あたりまで切る。

「切りおおせないか」

ケイが言う。

鬼は、動きが人間より緩慢な者が多い。その代わりに耐久力があるのだ。

その鬼は緑色の肌をしていて、血は真っ黒だった。ぶしゅと吹

く。腐臭にケイが顔を覆う。

今までの鬼とは違うなとケイが感じる。

「術が未熟になってるな」と呟く。

「どういことですか」

レインが言う。

「これは死体を使った鬼だが普通鬼になると腐らなくなるんだ」

生きたまま鬼になったケイとは違い、死体を使った鬼は、死んだ身体に適当な魂が、もとの魂を入れてつくられる。

「おかしいな」

ケイがそれでも刀を水平に持ち、襲いかかってくる鬼を切り結んだ。

ぼろぼろと空気に溶けていく。

「消えたか」

ケイが黙って刀を納めた。

「大丈夫でしたか」

あおいたちが戻ってきたのだ。

「大丈夫だ」

結界が一部破れてはいるが。

全員が戻ってくる。

「なんかにおいがまだ漂ってるような気がしますね」
レインが言う。

強烈なおいだったのだ。

「検討する必要があるな」

ケイは言う。

「山の妖怪は全部退治したよ」
昇が言う。

目の下に隈ができ、憔悴してるのがわかる。

「少し眠ったほうがいい」

ケイが言った。

「弓と矢は昇君の力で出てきているものだ」

「帰っても大丈夫ですか」

舞が言う。

「次の鬼が出てくるまで時間がありそうだからな」

「どうしてわかるんです」

「不完全な鬼を出してくるということは鬼を作り出すなにかが壊れたか不完全なんだ」

「そういうことですか」

レインが言いつつ札を一枚出す。

「これを持って行ってください」

「これは」

「もし昇君がひとりで鬼に会うようなことがあったとき、守ってくれるものです。もし出てきたらこれを投げて、逃げてきてください」

「わかった」

「これが舞さんの分」

「ありがとう」

もうあたりはうす暗くなっている。

「大丈夫」

あおいが言った。

「うん」

全員が解散する。

「夜中に襲われたりしないよな」

「もし襲われても俺が起きてる。全員たたき起こす」

ケイが言う。

「ケイ、また夜更かしするつもりですか」

「この騒ぎで本が読めてないんだ。読む」

レインに言われても、本を読むことだけは優先するケイである。

「じゃあお休みなさい」

舞が言う。

「気をつけて帰れよ」

たくやが言った。

夜のことだ。

「ケイ」

「なんだ」

レインがケイの部屋を訪ねた。

「ここの寺の結界のことで不審な点があります」

レインが言う。

「不審な点？」

「ええ」

本を閉じて、ケイが聞く。

「どんな」

「具体的にはうまく言えないのですが。外側の結界は私が知っている結界ですが、その奥の結界は日本のものではないような気がするんです」

「日本のものではない？」

「ええ」

レインは直感でものをいうことがあり。大概それは当たっている。

「夢を頻繁に見て、夢の中で学習している時があります」

「ああ」

レインの夢は、過去とつながっているのだとレインは言う。

「お前は前世で符術師だったからな」

「ええ。そのころの記憶が浮かんでくるのでしょう」

日本で作られる札のたぐいなら、大体看破できるのだが。

「中国のものかもしれないです」

「中国か」

「ええ」

レインは言う。

「あと結界を複数の人間が狙ってるんじゃないかなとも思います」
「それは俺も思う」

「今日山に行っている間に何がありました？」

「そうだな、まだあまり話してなかった」

とケイは話はじめる。

「鬼の種類がばらばらなのに気になりますね」
とレイン。

「やはりいくつか違うところから鬼をここに送りこんでいるような気がします」

「俺は鬼になるとき、いろんなものを失っていて、飢餓状態で、生きていくのもやっとなところだった」

「ええ」

「そこで、一人の鬼に会って、鬼になる方法を教えてもらった」

それからその鬼の言うとおりにして鬼になった。それから数百年。道成寺という連れができ、仕事をするようになり、レインの前世に会った。

「結界を作るときに、中国の僧が結界を作ったのではないでしょう
か」

「そういう線もあるな」

「あるいは中国で学んできたものを使ったという可能性もあります」

「そうだな」

「何にせよ私には結界を壊すことはできても封印し直すことは不可能だと思います」

「お前でも無理か」

「ええ」

「ちよつと厳しいな」

ケイが腕を組む。

「何重にも張ってある結界を、ひとつずつ壊して、そのたびに出てくる霊を浄化し、最後に鬼と妖怪を浄化して終わりですが」

「言うのは簡単だが」

「ええ」

「結界の中がどうなってるかも分からないからな」

「昇君の体調次第ですね」

「そうだな」

「たぐやくんとあおいさんだけでは少し荷が重い」

「俺とお前もいるだろう」

「私たちがあまり手を貸すのは勉強になりません」

「そういうことか」

「ええ」

いい機会だった。実戦で鬼とたたかうことができるのはこんなことがなければできない。

「でも私たちも出ないと無理なほどひどい状態の可能性もありますしね」

「まあ、あけてみないとわからないということか」

「そうです」

しかも結界は二つあり、どっちがどっちの結界なのかも分からない。

「明日には昇君が元気になって出てきてくれることを願いましょう」

「夜になると出てこないな。鬼」

ケイは言う。レインも疑問に思っていたのだ。

「満月が綺麗ですよ」

「満月か」

「月が明るい日はもののけは出てこないのかも知れません」

「そうかもな」

二人はしばらく満月を眺めていた。

あおいが学校に行くと、元気な昇と舞が来た。

「昇君は大丈夫？」

「大丈夫。一晩寝たらすっきりしたよ」

舞がにこにこしている。

たくやが時間ぎりぎりで教室に入ってくる。

あおいが自分の教室に戻っていく。

補習の授業となりのクラスである昇と舞のクラスの教室が使われているのだ。あおいはその少しの時間に舞と昇と多少しゃべって自分の教室に戻っていく。

自分のクラスに戻る。

「黒木さん」

「何？」

「あの、たくやくんと仲いいよね」

「はあ」

と答える。仲がいいというか、一緒に暮らしているのだが、知らない生徒も多い。

「この手紙渡してほしいの」

と言われてあおいがいいよと答える。

たくやは人気があるらしい。あおいはよくわからないのだが。勉強もできない、スポーツは普通くらい。でもまあ顔立ちは整ってるほうだと思うが、ケイほど美男子ではない。でも誰とも友達になるようなところはあるなと思う。

女の子とも屈託なくしゃべるし。そこらへんで女の子のほうで舞い上がってしまうことが多いのだ。渡してはおくが。どうなるかは分からないとあおいと思う。

別にあおいはたくやと付き合っているわけではないが。

ちよつと心が揺れる。あおいはたくやが好きだ。舞は知っているが。ほかの人はそうは思っていないようだ。

たまに学校でもしゃべることがあるが。一人占めしたいとかそういう感情はない。ただ。ずっと一緒にいたいなと思う。たくやのそばにいるのは心地よくて好きだ。

手紙をかばんの中に入れた。

「たくや」

「なんだ」

帰ってくるとたくやが軽装でどこかに行くようだった。

「暇？」

「ちよつと買い物に出かけてくるつもりだけどなんだ」

「手紙預かってるの」

「誰から」

「クラスメートの女の子」

言って渡す。たくやはそれをひらいてみて、あおいに言う。

「これくれた女の子に、俺には好きな人がいるって言うておいてくれ」

たくやが言う。

「わかった」

あおいが答えた。

好きな人かあ。本当にいるのかな。とあおいは思う。自分のことだったらいいなと少し思うが、そんなことはきつとないと思っていた。

がっかりするだろうなあ。あの子と思うが。あおいは自分から告白する勇気はなかった。失敗するのが怖いとかそんなことじゃなくて、両想いになるにしろ失恋するにしろ、変化してしまうことが怖かったのだった。今は今の幸せがある。とあおいは思う。

「で。来週の日曜日に二つの塔の結界をはずすことにした」とケイがおごそかに告げる。

舞と昇が寺にやってきていて、そう言われて姿勢を正す。

「しのぶさんはしばらく留守にするそうだ」

「だから私たちだけでやることになります」

「どこ行くんだ親父」

「四国巡礼だそうです」

「こんな時に」

「こんな時だからでしょう」

とレインは言った。

「これはみなさんに対しての試練です」

レインが言った。

「まあ、俺たちはサポートはするし結果をはずすところまではやってやるが、その先は自分たちでなんとかするしかないと思え」

ケイが言う。

「わかりました」

あおいが言う。

他の面子もうなずいた。

「これは訓練じゃない。実戦だ」

「はい」

昇が答える。

「わかった」

たくやも答えた。

「私は……足手まといでしょうか」

舞が言う。

全員が言葉を失った。いつものにこした舞ではない。

「舞ちゃん」

「足手まといなんてことはないよ。今回の敵はどんな敵か分からない。見抜く力を持つてるのは舞ちゃんだけだ」

昇が言う。

「足でまとい具合からいけば俺だって呪文を全部唱え終わる前に相手が向かってきたら無力でしかないからな」

たくやが言う。

「そうだよ。みんな少しずつ苦手があっても、全員力を合わせていけば大丈夫だよ」

あおいが言った。

「あおいちゃんはどうも苦手なんているの」

「私は力を使うと倒れてしまうから。矛を使うときは力を使うけれど。靈力をこつそり削られると弱くなる」

「それは僕も同じだし」

昇が言う。

「至近距離からの攻撃ができないし」

あおいが付け足す。

「遠くから狙えるけど攻撃には無防備だからね。僕は」

という昇に、舞が抱きついて泣き出す。

不安なのは誰でも同じことだ。思春期の真つただ中にいるということはそういうことだ。とケイが思う。

「話がまとまったところで」

ケイが言いだす。

「当日の作戦を練る」

「わかりました」

あおいが言う。

「まず西側の結界から外す」

「まずひとつめの結界をはずします。たぶんこの結界をはずしたら他の結界は自然にほどけてくると思います」

「そうなんですか」

あおいが聞く。

「はい。内側の結界がゆるくなったので外から補強してある状態なのが見てとれます。それから。これは私の予測でしかないですが」

「はい」

「中の結界を張ったのは日本人ではありません」

「そうなの」

「中国の僧ではないかと思いますが。誰なのかは分かりません」

「どうして」

「結界の種類が日本のものと違うのです」

妖怪と鬼は中国から渡ってきた可能性があるとレインが言う。

「何にせよはずしてみればわかることだが」

大量の霊も一緒に封印されてますから。その浄化も必要です。

「じゃあ浄化組と対妖怪、鬼組とわかれたほうがいいな」

とたくやが言う。

「俺と道成寺は外からくる鬼に対して攻撃を行う」

ケイが言う。

「たぶん今まで来たのは様子見もあるはずだ。その証拠にしばらく攻撃がない。山に封印された大きかった妖怪が消えた今結界が外れた時に結界内部の鬼と妖怪を吸収して大きな力にしたいと考えてるやつらがいるんだらうと俺は思う」

と言いつつケイが肩をならした。

「結界は、一番上の結界をはずすのだけは私がやります。あとは自然に壊れてしまうと思うので、そのあとはあおいさんたちにバトンタッチします」

浄化組にたくや、対妖怪と鬼にあおいと昇。と割り振る。

「舞ちゃんは」

「私が結界を張りますから、その中で敵を見据えてください」

レインが言う。

「わかりました」

舞が頷く。

「じゃあ、分かったら、話は終わりだ。各自、宿題に戻ってケイが言う。

「俺は本の続きでも読むかな」

ケイが立ち上がる。

「私は夕食のしたくをします」

レインが立った。

「あおい」

「なに」

「今日の宿題全然わからない」

たくやがさっぱりという顔をしてあおいに助けを求める。

「わかった、教えるから」
などと言いながら、たくやとあおいと昇と舞は本堂の机で勉強した。

日曜日は快晴だった。早朝からしのぶは荷物を持って出て行った。レインがそれを見送った。息子のたくやはまだ眠っているだろう。
「では頼んだ」
「はい」

お遍路をするつもりなのしのぶは、お遍路のかつこうをしていた。
「携帯も置いていく」

としのぶは言った。連絡はしようと思ってもできないところに行つて、息子を試すつもりだった。心配をしだしたらきりがない。

しのぶは自分の道を模索していた。妻ができて息子もできていい大人になっても道を探している。遍路に出るのはその道を探す手がかりがないかと思つたせいもあった。

「結界がなくなったら寺の意味はなくなるかもしれないと思うが」
「はい」

「それでも何か使いようがあるかもしれないと思つてな。それを考えてくるつもりだ」

「そうですか」
息子を、そして息子の仲間を信じている。

「行ってくる」
「行つてらっしゃい」
とレインが手を振った。

レインが寺にひっこむと、ケイが腕を組んで寺の門の内側にもたれて立っていた。
「起きたんですか」

「ああ」

「どうかしたんですか」

「いや、なんか俺もひとことふたこと話したいことがあったんだが」

「しのぶさんに？　今から走れば間に合いますよ」

「いや、いいんだ」

ケイはふいと歩きだす。

「もう一回寝る」

「ごはんになったら起こしますよ」

「たのむ」

昨日夜中まで本を読んでいたのをレインは知っている。

空には雲ひとつない快晴。何かそれが変に気になって、レインはため息をついた。過剰に神経が過敏になっている。

「とりあえず朝ごはんを作るかな」

とつぶやいた。

日常をこなしていないとつぶされてしまう気がする。

静かな寺の中。静かな本堂。経を読む声は今日は聞こえない。台所に立つと魚用のグリルでさんまを焼く。

イギリスにいたころは、時々日本食を食べる程度で、たいがいパンにジャムだけとかのごはんだった。本で日本の料理を読んで、ためしに作ってみたりもした。ここに来て、最初のうちはケイが作る料理を見よう見まねで覚えた。そのうち舌が味を覚えるようになり、今にいたる。最近は一入でも料理を作る。レインが来る前はしのぶとケイが交互に料理をつくっていたようだが。

「ごはんも炊けたしそろそろ呼ぼうかな」

独り言は癖だ。実家にはもう何年も帰っていないが、時々手紙を書く。

時々実家にいる夢を見る。暖炉のある部屋で両親がいる夢だ。

離れの階段を上がってすぐの部屋にいるケイを呼ぶ。

あおいはそのうち来るだろうし、たくやは今日も一番最後だろう。日常からのぶがいなくなっても普通にみんな生活するだろう。そ

れはたぶん、しのぶがみんなを信じていることもあるが、みんながしのぶを信じているということでもあるとレインは思う。

前置きはさておき、食事だ。

今日は炊き込みごはんに味噌汁にさんまだ。

ケイが来た。

「旨そうだな」

返事する。

「はい、おかわりもありますよ」

「おいしそう」

あおいが入ってくる。

さんまは生さんまが今年は安いらしい。たくさん買って冷凍した。

「たくやも一応起こしたけど」

来るかなあとあおいが言う。

「昇君たちが来るのは十時くらいですよね」

レインが聞いた。

「うん、それくらいに来るって言ってた」

あおいが答えながら手を合わせる。

「いただきます」

レインは箸もきちんと使う。ケイに教わって食べてるうちに上手になった。あおいも箸の使いかたはきれいだ。

もちろんケイもだ。

「いただきます」

と言いつつケイも食べ始める。

「おはようございます」

たくやがあくびをしながら入ってきた。血圧が低いせいだろう。ぼうつとしている。それでもいつもよりは遅い起床なのだが。

「味噌汁ありますから、最初に塩分をとると低血圧に効くそうですよ」

レインがそう言う。

「そうなんだ」

言いながらたくやは味噌汁を一口飲んだ。

ジーンズにトレーナーという格好だ。あおいも同じような格好をしている。

レインはジーンズにシャツ。

ケイは、着物だ。

仕事のない日は着物で通している。

「今日はバイト休んだ」

ケイが言いつつとなりの席を見た。狐がくるりと座布団の上で回ってよし落ちついたとでもいうようにちゃんと座った。

「こいつ割と強いぞ、レイン」

とケイが言う。

「こいつ？」

「ああ、この狐」

ケイが戦っているとき、攻撃したことを思い出す。青い火を吐いて相手をひるませた。

レインが山に持っていけなかったのでケイがふところに入れていたのだ。

「そうなんですか」

とレインが言う。

「頼もしいですね」

あおいが言う。

「そうだな」

たくやがぼうつとした表情で言う。

「道成寺」

「はい」

ふいに着物を着た大男がうつそりとケイの影から立ち上がる。

「ちよつと外見てきてくれ。なんか変な感じがする」

「わかりました」

消える。

「どうしたんですか」

「いや、なんか気配がするんだ」

「私は分かりませんが」

レインが言う。

あおいが眼鏡を外した。

「あ、なんか男の人が立ってる。霊っぽい」

という。

「死んでるんですか」

「どっちかというと生きてる人っぽいけど。私、霊って死んだ人の波長と生きている人の波長の区別がいまいちつかめてないから」

という。

道成寺が現れた。

「林という男です」

「そうか。なんだ用は」

「しのぶさんに会いたいそうで」

「そうか」

ケイが立ち上がった。

「俺がちよつと見てくる」

「はい」

レインが答える。

ケイは下駄をはいて外に出た。

「なんだ」

「しのぶさんに用があつてきました」

とサラリーマン風の男が言う。

「林さんと言ったな」

「はい」

「何の用だ。しのぶさんならばらく留守だ」

「残念ですね」

「何が」

「私の封印をしてくれたのですが、肺がんが見つかったのであの世にあと三か月ほどでいけるんです。喜んでもらおうと思ったのに」

男は言う。

「肺がん？」

「ええ、もう末期なんで」

そう言うとかふりと笑った。

「封印？」

「ええまあこちらの話です。それでは身をひるがえし、男が去っていく。」

「なんだったんだ」

ケイが首をひねりながら戻ってくる。

「どうしたんですか」

朝食の片付けをしているレインが聞く。

「いや、なんというか」

「生きた人でしたか」

あおいが聞く。

「いや、なんか三か月で亡くなるとか言ってた」

「あ。それで変だったんだ」

あおいは人の死期もぼんやりわかる。事故死なんかは分からないこともあるが。

「死んだ人が生きた人が区別できるといいんだけど」

あおいが言う。

たくやが大きく伸びをした。

「あと二時間か」

「そうですね」

レインが言う。

食卓に全員揃っている。

「しのぶさん今頃のへんだろう」

「電車と新幹線乗りついでいくって言っていましたよ」

「四国まで？」

「ええ。途中で船にのるかもしれないと言っていました」
「なんで一体今しかも四国なんだ」

「さあ」

「案外こないだ見てたテレビのみかんが食べたくなつたとかじゃねえだろうな」

四国のみかんの特集をテレビでやっていたのだ。

「いくらなんでもそんな理由じゃ」

とあおいが言いつつ、でもたくやのお父さんだもんなと思う。

「どうした」

あおいが笑いを押えて微妙な表情をしているのにたくやが気づく。

「なんでもない」

と言う。

「なんでもないのか」

「うん」

ふうんと言いつつ、たくやがひょいときつねの入っている筒を持
った。

「こいつって」

「ん」

「名前ないのか」

とたくやが言う。

「コンちゃん」

とあおいが言う。

唐突に名前が決まった。

「コンちゃんか」

「コンちゃんですか」

「コン……」

あおいが突発的に何か言うことがある。

「なんとなくそんな名前がいい感じがしたから」

とあおいが言う。

「コンちゃんにしておきましょう」

レインが言う。

「そうだな」

ケイが言う。

「名前ついてよかったなコン」
とたくやが言う。

「さて、そろそろ片付けますね」

時間が来たら中庭に集合ですよ。と言う。

「俺はそれまで本読んでる」

ケイが言いつつ立ち上がる。

「私は宿題」

「俺も宿題」

じゃあ解散。

と言って各自戻る。

寺にはゲーム機がない。テレビも一台だけだ。たくやは小学校の頃はゲームがやってみたいとしのぶにごねたこともあるが、金がないというひとことで終わった。

中学になっても塾に行かないたくやは勉強が遅れている。学校の勉強と補習だけで成績を維持しているあおいに多少コンプレックスがあるのも事実だ。

「宿題、見ようか」

「助かる」

たくやはそれでも少しずつ勉強している。高校は行きたいと思っているからだ。

成績は悪いが、頭は悪くないというのが担任の先生からの言葉だった。なんとか私立の高校に進学したいというたくやに、しのぶもそうかと言ってくれた。つい先日の話だ。

公立高校は無理。だと判断した。たくやの住んでいる地区では公立高校のほうがレベルが高い。

「あおい」

「ん」

「なんでこの英語の発音がこうなるか分からない」

「ああ、これはもう覚えるしかないよ。呪文と同じ」

「呪文かあ。意味分かってなくても使えてるもんなあ。俺、もし大
学行けるようなことになったら呪文の意味がわかるような学科に進
学してみたいな」

「がんばってみたら」

「そうだなあ」

たくやが自信なくうなずく。

「たくや、もっと勉強できるようになると思うよ。厳しい修行も耐
えてるし、もの覚えも悪くない」

「そうか？」

「うん」

だって。この前の宿題からだいぶ進歩してる。とあおいが言う。

「言われたとおりにノート作るようにしてるけどな」

「うん」

「なんとかレッスン5までは覚えた」

「たくや覚えるの早いもん、私は普通にしか覚えられないから、何
度も書くけど」

とあおいが言う。

「覚えるのは割と快感なんだよな」

たくやが言う。

「今まで忙しくてなかなか勉強できなかったから」

「そうだね」

「数学の公式とかも丸覚えならできると思うんだ」

「うん」

「今からでも間に合うか？」

「たくや次第だよ」

あおいが言った。

そんなことをしている間に十時になった。

「こんにちは」

舞の声がした。

「はい」

レインが出る。

「おまちしてました」

「これで全員揃った？」

疲弊していて、授業中も寝てばかりいた昇が、元気よく言う。

「若いなあ」

ケイがそう言った。

「ケイ」

「なんだ」

「あなたと比べたら大概の人間は若いです」

「そうだったな」

レインに言われてケイは答える。

ケイの肉体が、人間と同じように劣化していく身体に変わったのは数年前だ。18のときからずっと止まっていた時間が動き出したのだとを感じる。鍛えてはいるが、着実に衰えていく身体。それでもレインと同じ時を過ごしたいと願った時からケイは変わったのだ。

「さあ、行くぞ」

ケイが言う。

本堂の裏に向かった。

ちょうど本堂の裏手は板が張り巡らされていて、誰も入れないようになっている。

ケイがその板の一枚をはがした。道成寺も手伝う。

祠がふたつあった。

「結界が張り巡らされているな」

痛いほどの静けさがあたりを包んでいる。

「まずは一番最初の結界をはずします」

レインが告げると手を前に出した。

光が手からほとばしる。

ざわりと風が動いた。

「うわ」

昇が声を上げる。

ぐわ。と、腹の出た餓鬼が何人もこちらに来て消えた。

あおいが眼鏡を外したのだ。

それで昇天したものが何人かいる。

「あおいってやつばすげえな」

たくやが脱力しつつ言う。呪文の用意もしていたのだが。

「鬼に殺されたあと食われたものの魂だ」

と、ケイが言う。

「なぜ知ってるんです」

レインが言う。

「俺は食べたことはないぞ」

ケイは言う。

「私もありません」

道成寺が言った。

「里で食べた奴がいたがな」

ケイがそう言うのと腕をまわした。

「何にせよ気持のいいもんじゃない。食らうことでそのエネルギーを自分のものにできるといふがな」

と言った。

「次の結界はもう壊れてきていますから、十分気をつけて」

舞さんには結界を張ります。とレインが言う。

「お願いします」

と舞が言った。舞の能力は、結界の中にあっても使える。どうも違うことわりの中にある能力らしいとはケイの言葉だったが。

ごうつと音をたてて風が一陣吹いた。来る。と身構える。レインは札を出して寺より外にこの瘴気が出ていかないように結界を張った。

「レイン、あまり無理はするな」

「はい」

ケイが声をかける。レインはこのところ徹夜続きで札を書いていた。日常もきちんとこなしながらである。

「壊れきったな」

「ごわああああ。と声が響いた。」

「俺の眠りを覚ましたのは誰だ」

頭のなかに直接響いてきた声。

それぞれにも聞こえたようだ。

黒い霧のようなものがあたりに立ちこめ、腐臭が空気を満たす。

黒い鬼が立っていた。

髪のない頭、額から出たつの、牙のある口。眼はえぐられたようになって奥からきらきらと光が見える。

「怖い」

舞がそう呟く。

「大丈夫、舞ちゃん」

昇がそう言う。

「うん」

舞がそれに応える。

まずは鬼のほうの結界をあけたようだ。

「浄化」

たくやが呪文を発動させる。

空気が透明になる。

鬼が叫んだ。ぐおおおおお。と人の声はしていない。獣の遠吠えのようだった。

ああいが矛をかまえた。一撃。

「ぐああああ」

鬼が叫ぶ。黒い血が噴き出た。ああいはそれを避けて矛を抜いて後ろに下がる。

昇が矢を射る。矢継ぎ早に四本。鬼の腹にささった矢をまとめて鬼が抜き取る。

ぐああああああ。

また叫んだ。

鬼は動きだすと、隣の結界を引きちぎる。

「高子」

と頭の中で声がした。

「どこだ」

そこか。と頭に響く。

「しまった」

ケイが叫ぶ。

今度は赤い風が巻き上がった。

女が十二単で立っていた。こちらを向いた。頭にぱっくりと口があいている。

「どんな妖怪だったか全く知らなかったが」

「ふた口女」

昇が言う。

「あの妖怪は江戸時代くらいの妖怪じゃないのか」

ケイが言いつつ身構える。

「わらわはお前など知らぬ」

「高子」

舞が叫ぶ。

「気をつけて、その女の人、人を何人も食べてる。女が連れ込んだ男を鬼が殺してそれを食べてた」

そこまで見えたようだ。

二人が互いを見る。

鬼はぼたぼたと血を流しながら女の片腕をつかんだ。

妖怪の女は、ゆっくりと手を前に出した。

「急いで離れて」

舞が叫ぶ。

つかまれている方の手。女の爪がにゅと伸びると鬼の手を引っ掻ききった。

「高子おおおお」

鬼が泣き叫ぶ。

「知らぬ」

「浄化」

たくやが小さく唱えていた呪文を発動させる。赤い霧が消える。女が振り返り、たくやのほうに向かって手を伸ばした。爪が長く伸び、たくやの腕に突き刺さる。

「たくや」

「大丈夫だ」

抜き取ると、女はにたりと笑った。たくやを次の餌に選んだようだ。

「たくや下がって」

あおいが立ちふさがると、髪の毛がずるりと伸びてあおいの手に巻きついた。

「あおい」

たくやが叫ぶ。

昇が弓を引き、女に一本命中させる。

ぐあ、と女は言うが、ぐっとつかんで矢を抜き取る。ずる。とあおいが引きずられていく。

「あおい」

たくやが叫ぶ。

あおいがメガネをはずし、胸のポケットに入れた。あおいから光がほとばしる。自分の霊力を最大に流したのだ。

「ぎゃああ」

女が目を閉じて後ろに下がる。あおいにからまっていた髪がほどける。

あおいが矛を持ち直して、女を刺した。

ケイが鬼の方に走り、道成寺が鬼を捕まえた。ケイが殴る。

レインが舞のところまで下がる。

「舞さん」

「はい」

「他になにかわかりますか」

「今、読んでいます」

舞が言う。眼を閉じると、息を吐き、また吸う。

「見えました」

舞が言い目をあけた。

「その昔にこの男は鬼ではなかった」

舞がそう高らかに告げる。

「女もこんな姿ではなかった」

人間だったところに出会ったならもっと幸せになれる結果もあったかも知れないけど、すでに妖怪になっていた女を男が気に入り、女は男が嫌いだったが、女は人を食べるようになっていて、人間の男の肉を欲しがり男は女の求めるまま人を殺し続けた。

「そして男は鬼になった」

と舞が言う。

「女が妖怪になったのは、好きだった男を食べたときです」

「おいしかったわ」

と突如女が言いだした。

「あの人はおいしかったのよ」

「盗賊に襲われて夫を殺されて、何もなくてひもじくて食べた」

舞が言う。

「かわいそう」

と舞が言う。

「私たちでは分からない。食べるものがなくてひもじいなんてことは」

言葉では何とでも言える。でもきれいごとではなかったのだ。

「食べたことが引き金になって女は妖怪になった」

そしてその女を気に入った男も他の男を食べたがる女に食べさせる男を殺し続けて鬼になった。舞がそう言う。

「封印したのは旅の僧」

と呟いて、舞がかくんと崩れる。レインが舞の周りに張っていた

結界をといて舞にかけよる。もう一度結界を張り直す。

「大丈夫ですか」

レインが言う。

「旅の僧は唐にもわたったことのある僧から封印の仕方を習っていた。それが、たくやくんの先祖」

ぐったりしながら舞は滔々としやべっていく。私たちはかつて封印した者たちの意思を継いでいる。と言いながら目を閉じた。

昇が心配そうにそちらを見るが、今は敵が先と、弓を引いた。

やがて二つの敵は動かなくなった。

「浄化」

とたくやが言う。

光が包み込む。あおいが眼鏡をかけた。

消えていく。

「これでよかったんだろうか」

たくやがつぶやく。

「私たちでは分からない」

とあおいが言う。レインが辺りに塩をまき、きれいにする。

「舞ちゃん」

昇がレインと舞のいるところまで走る。

「大丈夫」

静かになった寺の本堂の裏から出て、全員がほっと胸をなでおろした。

第五部（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210v/>

あおいと仲間たち

2011年8月6日03時31分発行